

## 翻刻 曲亭馬琴の黄表紙 (七)

### 凡例

- 一、前号に引きつづき、曲亭馬琴の黄表紙四編を翻刻した。  
今回は、その第七回として、寛政十一年刊「六代目団十郎追善 東発名 皐月落際」・「鯨魚尺品革羽織」・「彼岸桜勝花談義」・「料理茶話即席説」をとりあげた。
- 一、底本には、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本を用い、大東急記念文庫本及び国立国会図書館本によって校合した。
- 一、黄表紙の性格上、絵組が重要であるので、複製のかたちで各丁見開きの面を一枚の写真とし、丁付により「一ウー二オ」のように示した。なお、この写真は、加賀文庫蔵本を手控え用として撮影させていただいたもので、都立中央図書館の許可を得て掲載した。
- 一、本文翻刻は、やはり「一ウー二オ」のように冠して、写

清 田 啓 子

真と対応させた。丁移りは「で示したが、書入れについては丁付にこだわらなかった。

- 一、上記の一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ、「五ウ」「六オ」というふうに分離した。

- 一、翻刻については次の方針によった。

- 1 原文はできる限りそのままとする。かなづかい、あて字、おどり字、濁点等は改めなかった。
- 2 漢字・仮名とも、異体・略体字は、現行のものに改めた。
- 3 読みやすくするため、句読点は補った。
- 4 スペースの関係上、漢字におきかえた所もある。その場合、もとの仮名をルビに移した。
- 5 原文の振り仮名は、右と区別するために（ ）に入れた。

ただし、序文はおおむね仮名つきなので、一々（ ）はつけず、その旨をその箇所ごとに断った。

6 書入れは、本文のあとへ一段下げて付け足し、大体右から左へ、上段から下段へという順で並べた。

7 脱字と思われるものはへゝ内に補い、衍字と思われるものはへゝに入れた。

8 判読しにくい箇所も数多くあったが、読みとれた形に一応おきかえて、大方の御示教を仰ぎ待つこととした。

都立中央図書館・大東急記念文庫・国立国会図書館の御好意に感謝いたします。

## 付記

寛政十一年に刊行された馬琴の黄表紙七編の中、「世諺紺屋雛形」は日本名著全集 黄表紙廿五種に収められ、「風見草婦女節用」は林美一氏編「馬琴好色黄表紙集」にとられている。残り五編を一括して今回翻刻できればよかったのだが、三巻ものが多く、分量的に無理であったので、「无茶尽

押兵」は来年度に載せることにした。

群馬大学の板垣則子氏が、今年度の同大学教育学部紀要

(第三十一巻)に、享和二年刊の馬琴黄表紙の中、「足手書草帋書賦」「買飴紙鳶野弄話」の二編を翻刻せられた。同氏のお話では、同年刊の八編を四年がかりで翻刻なさるということである。

本格的な馬琴全集の望み得ない現在、読みにくい黄表紙だけでも活字にうつして、(それは初期の活動を示すだけに、無視できないと考えられたので)若い研究者のノート代りに使って頂こうと始めたこの翻刻であったが、連帯の同志が現れたことは、大変心強く、ありがたいと思う。馬琴の黄表紙翻刻完結を何年か早められることになった。そして、なお多くの方が加わって下されば、それだけ早く完結すること、この機会にお願い申し上げたい。

また、前号までのミスプリント、誤刻などを、本大学非常勤講師・山田みどり氏が克明に指摘して下さった。それはかなりの量になるので機を得て掲載したいと思う。

えどのはな さつきのちりぎは  
東発名臯月落際

〔振り仮名は原文のまま〕

〔一オ〕

市川の流<sup>た</sup>れは絶<sup>た</sup>ずしてしかともの水にはあらず、六代目団  
十郎はお江戸の花の舎<sup>つほ</sup>より匂<sup>にほ</sup>ひ四方<sup>よも</sup>に薫<sup>くん</sup>じて其名<sup>その</sup>は高き花の  
兄<sup>あに</sup>貴<sup>き</sup>、梅<sup>うめ</sup>に実<sup>み</sup>の入<sup>い</sup>る五月雨<sup>さみだれ</sup>の比<sup>こ</sup>十<sup>と</sup>あまり三<sup>さん</sup>か<sup>か</sup>のあした、廿四  
番<sup>くわんしゅう</sup>の花信風<sup>な</sup>ならで廿二才<sup>むじゅう</sup>の無常<sup>むじょう</sup>の風に吹折<sup>う</sup>られて、鶯<sup>うぐいす</sup>の老<sup>おい</sup>を  
啼<sup>なくはく</sup>白猿<sup>あま</sup>が悲<sup>かな</sup>しみ、最<sup>ひい</sup>賈<sup>き</sup>百万人<sup>ひゃくまん</sup>の涙<sup>なみだ</sup>は三升<sup>さんしやう</sup>にも溢<sup>あふ</sup>れつべし、名  
といひ伎<sup>わざ</sup>といひ梨園<sup>りえん</sup>の子弟<sup>してい</sup>多<sup>おほ</sup>しといへ共執<sup>たれ</sup>か此人<sup>このひと</sup>の右<sup>みぎ</sup>に出  
ん、惜<sup>おし</sup>ても惜<sup>おし</sup>むべきは三升<sup>さんしやう</sup>なり、よて追善<sup>ついぜん</sup>の戯作<sup>けさく</sup>せよと例<sup>れい</sup>の  
鶴屋<sup>つるや</sup>が頓<sup>とみ</sup>の需<sup>もとめ</sup>に応<sup>おう</sup>じて貰<sup>もら</sup>ひの涙<sup>なみだ</sup>を硯<sup>すずり</sup>に受<sup>う</sup>けて筆<sup>ふで</sup>の命毛<sup>いのちげ</sup>長<sup>なが</sup>から  
ざるをうらみ、聊<sup>いささ</sup>よまい言<sup>こと</sup>を申<sup>あへ</sup>合<sup>あ</sup>る耳<sup>のみみ</sup>。

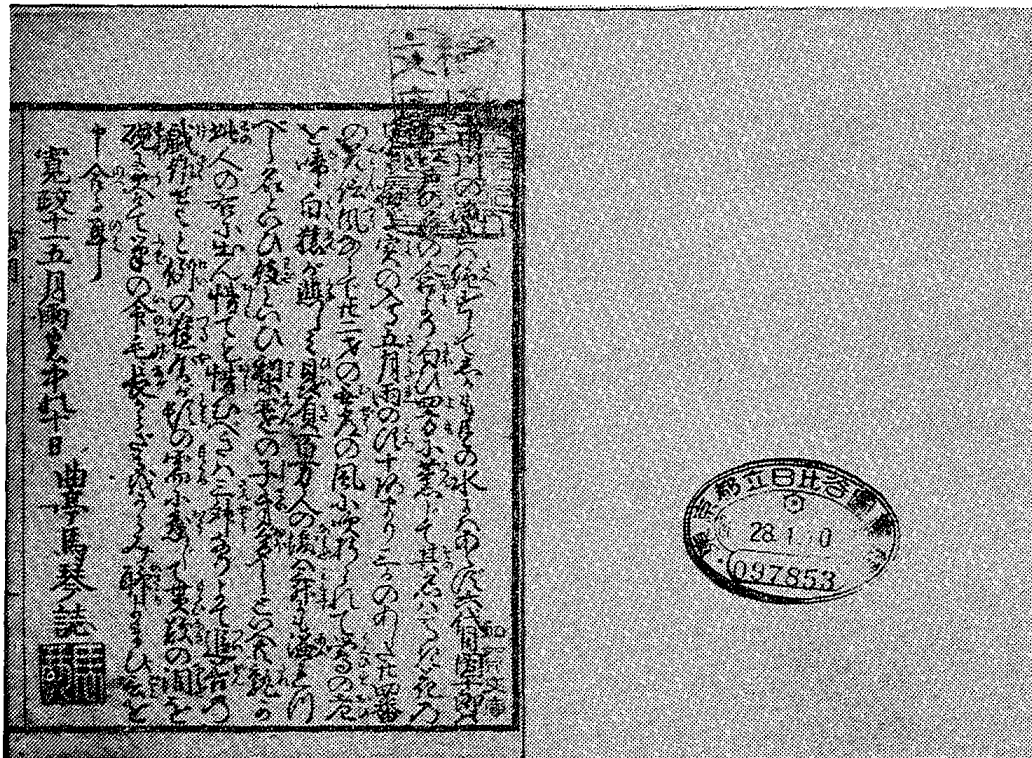
寛政十一五月雨の中の十日

曲亭馬琴誌

〔二ウー二オ〕

なへてよの中のはかなきものは人の命なり。六代め市川団十

〔一オ〕



郎は去年顔見世より座頭の大立者となり、お江戸八百八町の  
 氣受よく最賃連中のよろこびかぎりなく、此人こそ年三十を  
 越たらんには古今の名人ともなりて、先祖才牛栢庭が右へい  
 づるとも劣りはせじと、たゞ老先のみ楽しみたりしも、思は  
 ざりき此卯月中むら座にて忠臣蔵の寺岡平右衛門となりて」  
 狂言なかば、同月廿四日より心地例ならずとて打臥けるにぞ  
 諸人眉をひそめ手に汗をにぎり、只よそながら神仏に祈誓を  
 かけて此人の命ながからんことを願ひし。百万人の最賃の控  
 綱も無常の風に吹切れ、遂にてら岡平右衛門を此よの名残に  
 して廿二才の秋さへ待ず、五月十三日のあかつき、弥陀十万  
 億土のお国元へ飛脚に立ちしはいかなる役廻にかあらんと、  
 諸人の涙五月雨よりおびたしく、市川の水これがために濁  
 りける。

へ岡十郎平右衛門の役よりすぐに十万億土の弥陀のお国へ  
 飛脚にたつ。

へ冥途の馬はみな畜生道より出るゆへ、顔はやはり人げん  
 にて手足は馬なり。芝居の馬は手足が人間で顔ばかり畜生

「二才」





なれば、団十郎心のうちであべこべなるをおかしく思ふ。

「だん那もどり馬だ、やすくやりやしやう。」

「ニウー三オ」

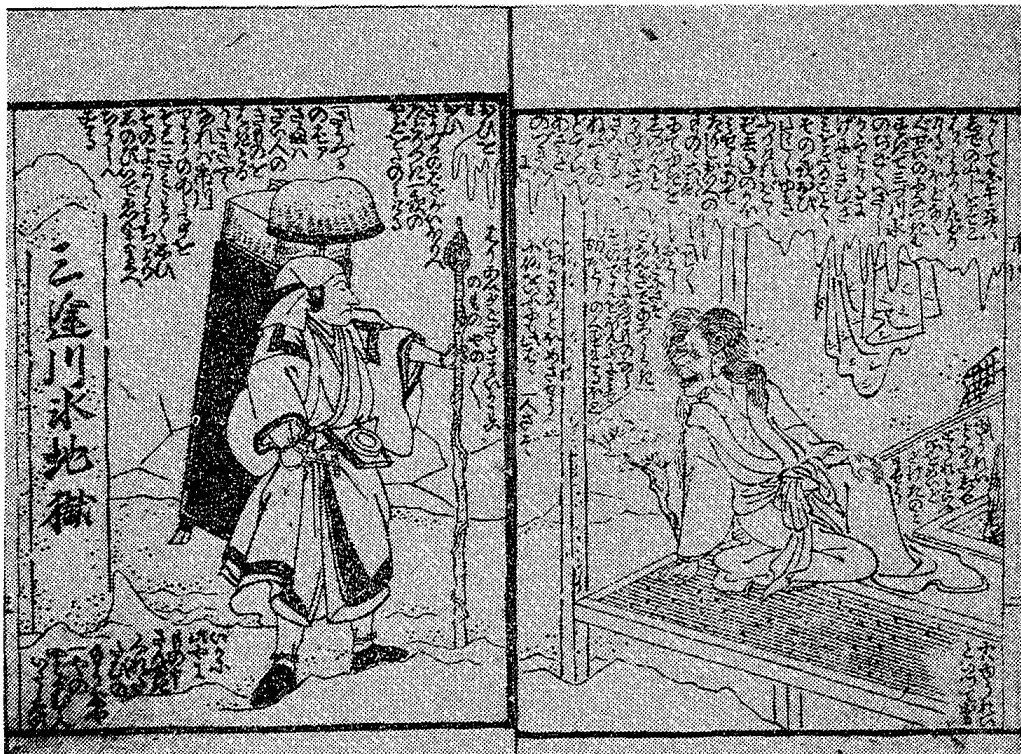
かくて団十郎は死出の山路をそこはかとなく辿りけるが、  
ほどなく弘誓の舟付も過て三づ川氷の地獄へさしかゝりける  
に、実も寒さ身をきることく、その夜おびたしく雪降りけ  
れば、こゝぞ去年の顔見世に当たりしお家の物々六部にて雪  
をしのがんと、かねて携へたる鼠のどてら浅黄の頭巾に「笈  
をせおひ、三途河の婆の庵へたどりつき、一夜の宿を頼みけ  
る。

「さうづかのばアさまは罪人の着物を剥取る敵役なれば、  
市川の流の荒事を底気味悪く思ひ、其夜裏道より忍びいで、  
ゑんま王へ注進する。」

「ゆうれい、どなたじや、どうれといふ所を、冥途だけ頼  
みませうには幽霊といつて出る。」

「ヤレ／＼お年若だにさぞ御難儀であらう、浮世がまゝに

「ニウー三オ」



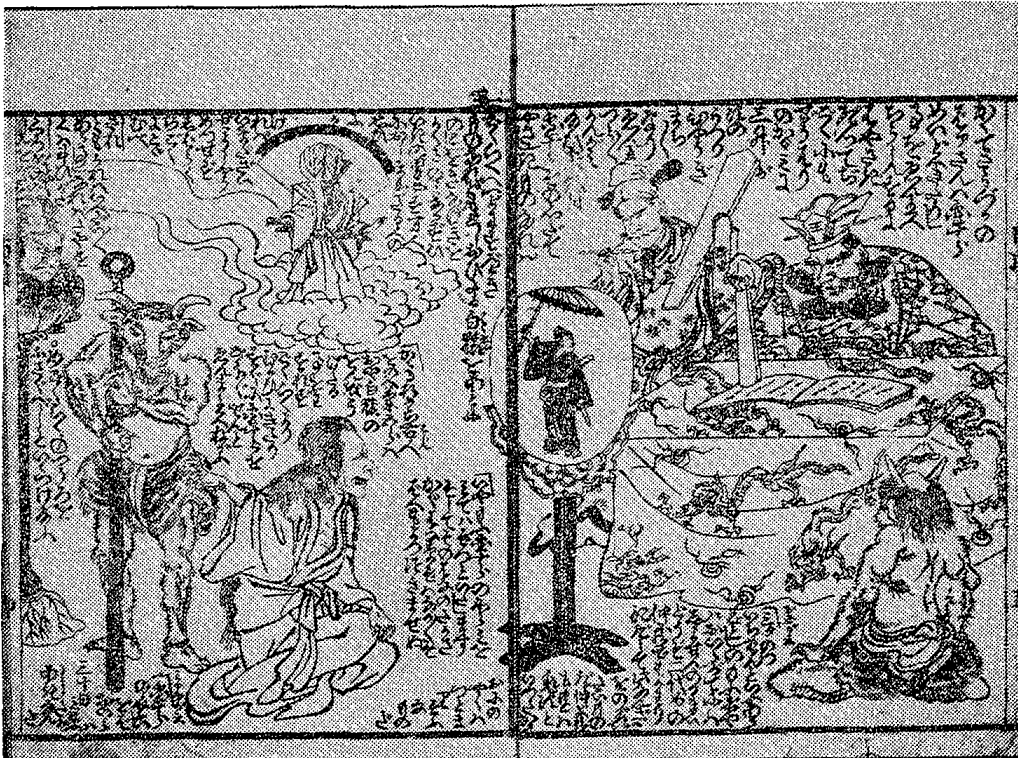
なるものなら、その出端を凡夫にみせ、切落のくずれるほど市川つと賞めさせうに、何をいふにも此ば一人、さぞ張合がござるまい、かわいのものや／＼の。

いかに此家にも申しさん、行暮た旅のもうじや、一夜の宿が無心いたしたい。

〔三ウー四オ〕

かくて三途河のばアさんは団十郎めいどへきたりし事をゑん王へ注進するに、はや先立て地獄にも浄玻璃の鏡に三升が姿うつり、評議ま／＼なり。ゑん王つらく鑑み給ひ、六代目団十郎その心だてやさしきものなれば「極楽へは遣すベきものなれども、年老ひたる白猿をあとに残し置き、歎きをかくるのみならず、ひいきの男女数万人に惜まれたる人の思ひふかければ、いまだ罪障消滅せず、暫く地獄に留むべし、されとも彼は家代々荒事師なれば、たやすくは斗ひがたし、早く鉄の門を固め、極楽の通路をふさぐべしと言付給ふ。

〔三ウー四オ〕



へかゝる折から古人尾上菊五郎は、おや白猿の恩をうけたる事を忘れず、極楽より迎ひに來り、すぐに団十郎を同道せんとゑんま王へ願ふ。

へいやもふ団十郎の睨みを見てはぞつといたします。そしてその鼻の高さ嗅鼻などはなく、傍へも寄付きませぬ。

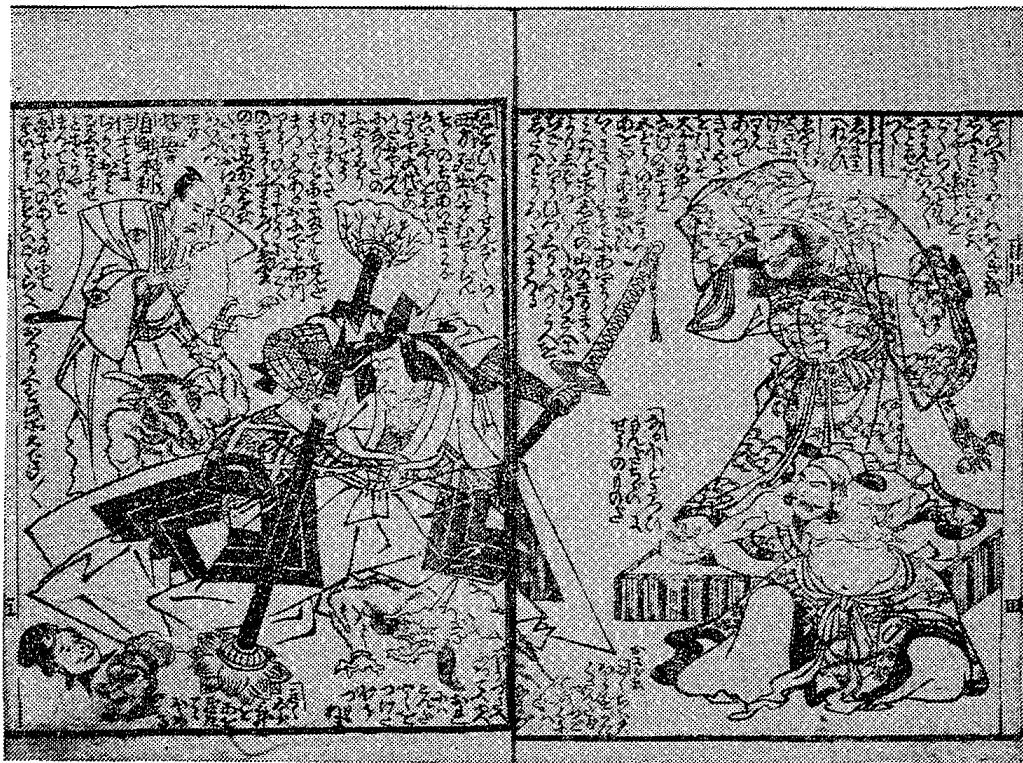
鬼が云へ三ヶの津一番といふ荒事師の亡者はおいらが手には所詮のるまい、どうぞ二代めの仲蔵でも代りにだして此なんぎを逃れたいものだ、仲蔵ももとは鬼江といったから、鬼の役は勤まりそふなものだ。

視目が云へ団十郎の介六をばおいらは三十日見通したが飽なんだ。

〔四ウー五オ〕

尾上菊五郎は恩義を思ふ和事師なれば、はやく団十郎を極楽へ伴わんといろく言葉を尽しゑんま王へ願ひしかば、ゑん王大きに逆鱗あつて菊五郎を引たて、大がまの中へ投入れよと五道の冥官青鬼赤鬼に言渡し、既に危くみへたる所

〔四ウー五オ〕



へ、死出<sup>しで</sup>の山の切幕<sup>きりまく</sup>より、暫く<sup>しばら</sup>の掛声<sup>かけこへ</sup>に地獄中<sup>ぢごくちゆう</sup>ひつくり  
かへり、上<sup>うへ</sup>を下<sup>した</sup>へとうろたへまはる。」

へ遠<sup>とを</sup>ひ黄泉極楽<sup>くわうせんごくらく</sup>西方死出<sup>さいはうしで</sup>八方無常迅速<sup>むぜうちんそく</sup>のその間に我戒名<sup>わがかいみやう</sup>  
を知<sup>し</sup>ざるや、六代このかた親分<sup>おやかん</sup>になりたの不動明王<sup>ふどうめうわう</sup>ぜうのう  
まくさまんだ婆様<sup>ばあさま</sup>てもせんだ真赤<sup>まつか</sup>な赤鬼<sup>あかおに</sup>でも、市川流<sup>りう</sup>の隈取<sup>くまどり</sup>  
に地獄<sup>ぢごく</sup>のすみから角鬘<sup>すみかうら</sup>、ゑんまのみるめへかぐはなは高<sup>たか</sup>いお  
江戸の名物男<sup>めいぶつ</sup>、皆蒼自到本利信士<sup>かいよじとうほんせつしんし</sup>と目近<sup>まぢか</sup>くおがみ、御回向<sup>ごまこう</sup>申  
せとホ、うやまつてもふす。

へ団十郎家<sup>だんじゅうけ</sup>の荒事<sup>あら</sup>にて梅幸<sup>ばいこう</sup>を救<sup>すく</sup>い、極楽<sup>ごくらく</sup>へ送り返<sup>おくかへ</sup>す、此所大  
でけく。

へなるほどきついもんだ、爺<sup>ぢい</sup>に正<sup>せい</sup>のものだ。

おにが云<sup>い</sup>へ極楽<sup>ごくらく</sup>には坊主<sup>ぼうず</sup>が沢山<sup>たくさん</sup>だが地獄<sup>ぢごく</sup>にはなまつ坊主<sup>ぼうず</sup>  
さへ払底<sup>はらてい</sup>ゆへ、おれにはとんだ役<sup>やく</sup>をつけた、ぼうづもねエ。

へきく五郎三升<sup>ごろうさんしやう</sup>を仰<sup>あを</sup>ぎたてゝほめる。

〔五ウ〕〔六オ〕



〔五ウ〕

団十郎は難なく梅幸が難儀を救ひ、それより極楽へと急ぎけるが、かねて閻王の勅をうけたる鬼ども鉄の門を固め、極楽の通路を塞ぎければ、三升ひそかに計り事を案じ出し、鬼殺の酒の粕をまるめて丸薬にこしらへ、家の芸の外郎売の白にて鬼どもに心を許させ、かの丸薬を鬼に吞せければ、鬼殺の毒に中り番の鬼ども正体なく打臥したる隙に、難なく鉄城の関をこへる。

「こゝへもください。」

なるほど外郎売の白は妙だ。とてもものに娑婆でさせたら尚落がこように、おいしいことだ。

〔六オ〕

さても団十郎は外郎売の白にて難なく鉄の門を越済しけるが、忽ち数万の鼠現はれ、猛火しきりに燃上りければ、さては国に盗人家に鼠といへる如く、娑婆にて小盗をなしたる者皆畜生道へおち、かゝる鼠の苦みをするものならんと、この春当たる荒獅子男之介の鉄扇にて鼠の頭を打碎き、煩惱苦

提の方便を説て、残らず仏果をえさせけるぞ奇特なる。

昔叡山の頼豪は生ながら鼠となる、迷うてこゝにき鼠なら、早く成仏しろ鼠廿日鼠の三七日みそ、どぶ漬ならぬどぶ鼠、百八疋の煩惱菩提仏果をえよや嫁が君ヒウドロく。

どろくく。

〔六ウーセオ〕

極楽までの道程はおよそ十万億土にて一百三十六地獄越されば極楽へいき難し。団十郎は畜生道の苦痛を救ひ、尚道を求めて急ぎけるが、忽ち火焰ゑんくと燃て罪人叫喚の声聞へければ、いかなる事にやとよく見るに赤鬼黒鬼の牛頭馬面炭火をおこし、その上に大きな青竹を渡し、罪人を竹の上へ追上げ責立てけるにぞ団十郎この苦痛をみるに忍びづ先祖相伝の荒事竹拔五郎の立出にて、かの渡したる青竹を引抜き、鬼共を火の中へ打ち込み、焦熱地獄の苦痛を助ける。



「ガタリ／＼ガタ／＼、幽霊に足拍子はない筈だといひつこなし。」

「町内に仏はおらぬか、ヤレ鬼殺し／＼。」

「イヨひとだまア。」

「亡者共団十郎の荒事にて焦熱地獄の苦痛を逃れ、喜びのあまり人玉のさし出しにて後見をする。」

〔セウ〕

鬼共は地獄の固めを残ず団十郎に破られ、所詮力づくにては止め難し、謀りてかれが舌を抜んと梁の上に隠れいたりしに、過ちて上より取落したる釘抜さかさまに立ちければ、団十郎は代々当たる糸寺弾正の役を思ひ出し、釘抜の逆様にたつをみて上に忍びの鬼ありと悟り、忽ち鬼を鎗にて突生し遂に地獄の暇をとらせる。

「ハテ合点のゆかぬ此釘抜、まさしく大工の人玉なるか、但し奴の定紋か、何にもせよ奇体な業をみるものじやナア。」

〔六ウー七オ〕



〔八才〕

鬼共は所々の固めを破られ、もはや剣の山ひとつ越れば極楽へ出る近道なれども、いかなる荒事師なりともこの山を越る芸はあるまじと、少し油断していたりし所に、思ひの外団十郎は躰景清の車にのり、とげ一本の踏抜もせずやすくと剣の山をこへてゆく。

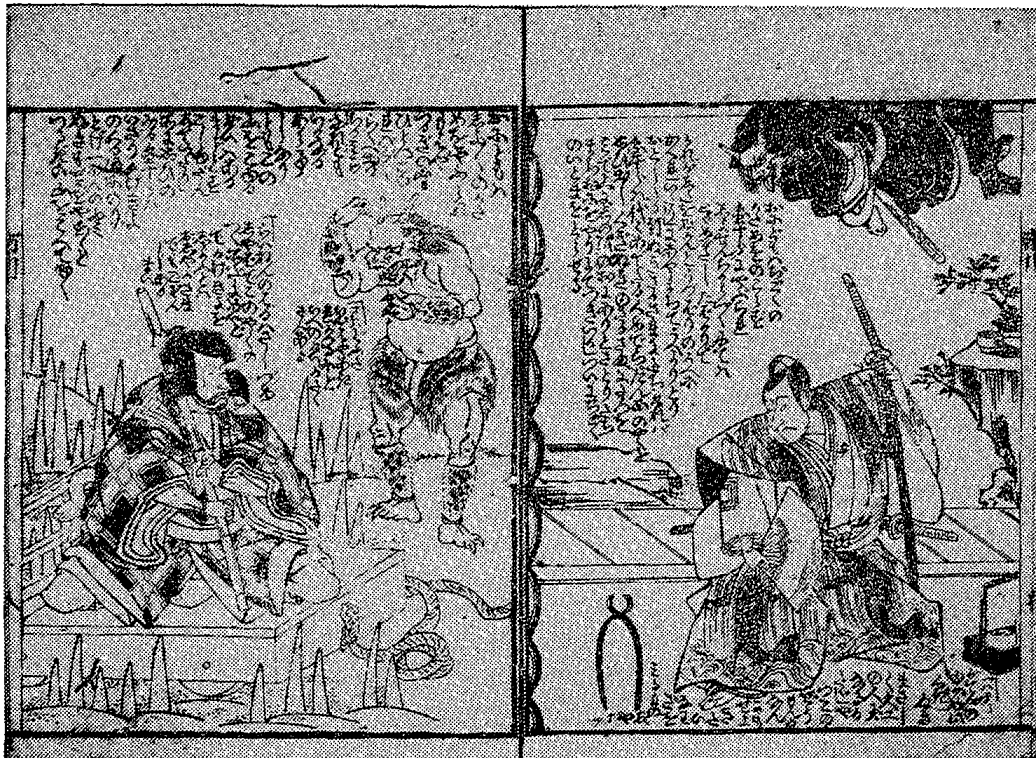
「コレハどふだ、いやはや呆れ返るほど家の芸が沢山ある。

「来年の春はさしづめ娑婆でこの役のつく所だに、冥途で景清をしよふとはお釈迦様でもござんじあるまい。

〔八才九才〕

かくて団十郎は躰景清の車にて剣の山を越すまじ、極楽の東門へさしかかりけるに、この時娑婆にて最良の男女の涙血の雨となり降来りければ、此春当たる介六の傘にて血の涙の雨を凌ぎ、程なく蓮華の花道へいづれば、市川によしみある役者極楽より迎いに出来るが、団十郎が娑介六の出端なるをみて、先白猿と兄弟分なる秀雀は意休」の出たち、中村里

〔七才〕 〔八才〕





好は揚卷の姿、古人万菊は白玉、白酒売は門之介、くわんへ  
ら門兵衛は嵐七五郎、伊東九郎は二代めの仲蔵、朝顔仙平は  
松本大七、その他古人中車雷蔵、先三ッ五郎友右衛門、故人  
広右衛門この外極楽惣座中馳走のため迎いに出て後見を勤め  
ける。

河東へこの鉢巻は過し頃、風のこゝちと打臥し頭痛のあ  
との紫に、縁の色の形見なり。

へすけ六さん、その鉢巻かへ。

へこれはよい座組だ、この座組でもふ一度娑婆のごけんぶ  
つさまにおめにかきたい。

〔九ウー十オ〕

団十郎は仲蔵門之介菊五郎の案内にて、極楽の楽屋へ入け  
れば、先祖才牛は市川の水上にたちて芸道の光を遺し、二代  
めの白猿は成田の不動と頭れ、三代め団十郎は勢多迦童子、  
四代め木場の爺ゑび蔵は金迦羅童子、今の三升が兄もゝ太郎  
にも名告会い、安堵の思ひをなしにける。然るに此度団十郎

〔八ウー九オ〕



市川<sup>あら</sup>の荒事<sup>ざいにん</sup>にて罪人<sup>すく</sup>を救<sup>い</sup>ひ出し、極楽<sup>ごくらく</sup>へ導<sup>みちび</sup>きし功德<sup>くどく</sup>阿弥陀<sup>あみだ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>の御感<sup>かん</sup>あつく、三升<sup>ぼさつ</sup>菩薩<sup>ごう</sup>の号<sup>ごう</sup>を許<sup>ゆる</sup>し、永<sup>なが</sup>く仏果<sup>ぶつぐわ</sup>に至<sup>いた</sup>らせ給<sup>たま</sup>ふ。

「イヤモウなにをさせてもきつひものでござります。

市川<sup>ます</sup>三升<sup>もん</sup>の紋<sup>はしま</sup>の始<sup>は</sup>り、不破<sup>い</sup>伴<sup>なうま</sup>左<sup>もよう</sup>エ門<sup>しえ</sup>の稻妻<sup>いなづま</sup>の模様<sup>もよう</sup>、紫衣<sup>しえ</sup>となりてあらわる。

「この子<sup>ぶつぐわ</sup>の仏果<sup>え</sup>を得<sup>え</sup>たは喜<sup>よろこ</sup>ばしいが、いかにしても白<sup>はく</sup>ゑん殿<sup>どの</sup>、歎<sup>なげ</sup>きがきのどくでござる。

「家代<sup>いへ</sup>くの尊<sup>そん</sup>霊<sup>れい</sup>を拜<sup>はい</sup>し、いか斗<sup>ばかり</sup>有<sup>あり</sup>難<sup>がた</sup>ふぞんじます。

〔十ウ〕

六代目<sup>むく</sup>三升<sup>さん</sup>は安永<sup>あん</sup>七戌<sup>しち</sup>としに生<sup>う</sup>まれ、天明<sup>ていめい</sup>三年<sup>さん</sup>の春<sup>はる</sup>かと覚<sup>おぼ</sup>へし市川<sup>し</sup>徳蔵<sup>とく</sup>とて僅<sup>わずか</sup>か六才<sup>ろくさい</sup>にて中村<sup>なかつむら</sup>座<sup>ざ</sup>の初<sup>はつ</sup>舞<sup>ふ</sup>台<sup>たい</sup>、按摩<sup>あん</sup>鍼<sup>しん</sup>の療<sup>りやう</sup>治<sup>ち</sup>評判<sup>ひやうばん</sup>よく、それよりだんくの<sup>しやうたつ</sup>上<sup>う</sup>達<sup>たつ</sup>にて、去年<sup>ねん</sup>顔<sup>かほ</sup>見<sup>み</sup>世<sup>せ</sup>廿一才<sup>にじゅういちさい</sup>にて大立<sup>だて</sup>者<sup>もの</sup>となり、座頭<sup>ざかしろ</sup>を勤<sup>つと</sup>めし古今<sup>ここん</sup>のまれもの、いまだその例<sup>たと</sup>を聞<sup>き</sup>く、然<sup>しか</sup>るをことし此<sup>なつ</sup>夏<sup>なつ</sup>かくはかなき事<sup>こと</sup>の聞<sup>き</sup>けられ、家<sup>いへ</sup>の芸<sup>げい</sup>さへ見<sup>み</sup>残<sup>のこ</sup>して名<sup>な</sup>残<sup>のこ</sup>を惜<sup>おし</sup>む見<sup>けん</sup>物<sup>ぶつ</sup>いくばくそや、よつて市川<sup>し</sup>流<sup>りゅう</sup>の家<sup>いへ</sup>の芸<sup>げい</sup>をそのまゝに作<sup>つく</sup>りなし、この俳<sup>わ</sup>優<sup>お</sup>を好<sup>この</sup>める

〔九ウ—十オ〕



人の手向の種とするものなり。

寛政十一未年

(かいよじとうほんせう)  
皆誉自到水刹

五月十三日

と芝常照院にしるしをのこせり。いらぬ世話ながら御最  
眞の御方様一へんの御回向を、ア、モウ書まい、またく  
春はめでたく愚作御目にかけて申候。

乍序此所に御ひろう仕候、役者名所図会と申本、当暮出  
板仕候。是は芝居を名所に見立候絵入よみ本に御座候、出  
板の節御もとめ御らん可被下候。 曲亭馬琴作

悼<sup>ス</sup>三市川三升<sup>ッ</sup>

団十郎嗚呼つかもない若死は、可愛のものやなく

曲亭主人

〔十ウ〕



# 鯨魚尺品革羽織

〔一オ〕

「コレ」草双紙の小板物を見せさせへ。ハイこれが新  
板でござります。代はなにほどだ。一冊十文づくでござ  
ります。へたんととるから少と負けさせへな。御如才わ  
こさりませぬ。へフウこりやア鶴屋の板だの。道理で板行が  
はつきりと判るの。へ鶴屋は毎年彫を吟味いたしますからこ  
らんなさりやうござります。へお嬢さんごらん遊ばせ、馬琴  
作としてござります。アレサそうあそばすと上中下がまちが  
ひます。モシく睡をつけてお開け遊ばすと後でおつかひ物  
になりませぬ。べちやくちやべちやくちや〜。

〔二ウ〕

（振り仮名原文のまま）  
鯨海中大魚也。一名海龍王。雄曰鯨。雌曰鯨。左伝。  
正義。述異。広興記。博物典彙。正字通之旧説各有二異同一。

〔一オ〕



しかうしてひとりしがほんざうこうちくにいるうせらるゝは  
而独遺漏干李氏本草綱目。何邪。本朝諸名家。往々  
これをへんするのしよばいきよにいとまあらす。しかりといへども。をくどづさんのせつ。またおほからすと  
辨レ之書。不遑二枚挙一。雖。然。臆度杜撰之説。又不レ為レ  
不レ多矣。余退参考之一。遂著二二三図説。詳二其形状一。  
けいきよ。まんえうにいさなとくんず。ぞくよんで。くしちとするものこれなり。  
鯨魚。万葉訓ニ以沙那一。俗喚為ニ苦矢辣一者是也。

寛政十一己未年孟春

曲亭馬琴撰

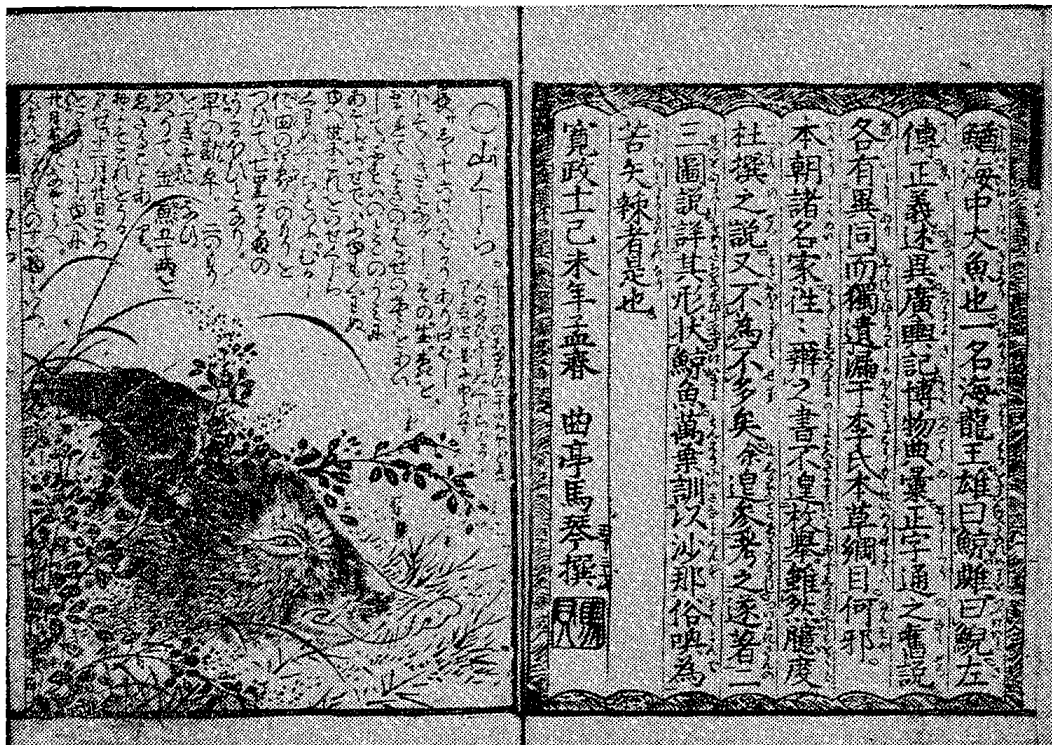
〔二オ〕

くじらの種類二十種ほど有。人の思ひよらぬくじらばか  
り三つ四つ図にあらはす。

### ○山くじら

長サし十六間ばかりあり。口ばし細く牙長し。その生。森  
を怖れて。萩の葉風の波を愛して。臥猪の床の海に遊ぶ。伊  
勢では冬も食ぬゆへ。世にこれをいせくじらくわぬくじらと  
いふ。昔仁田の四郎。一の銚を突て。七里が浜の潤ひとな  
り。早の勘平。二の銚を突損ひ。かへりて金魚五十兩をゑた  
ることあり。およそこれ売る店。十二月廿日ごろをかぎり  
とす。ゆへに廿日草になぞらへ。人よんで牡丹の吸物とい  
ふ。

〔一ウ〕〔二オ〕



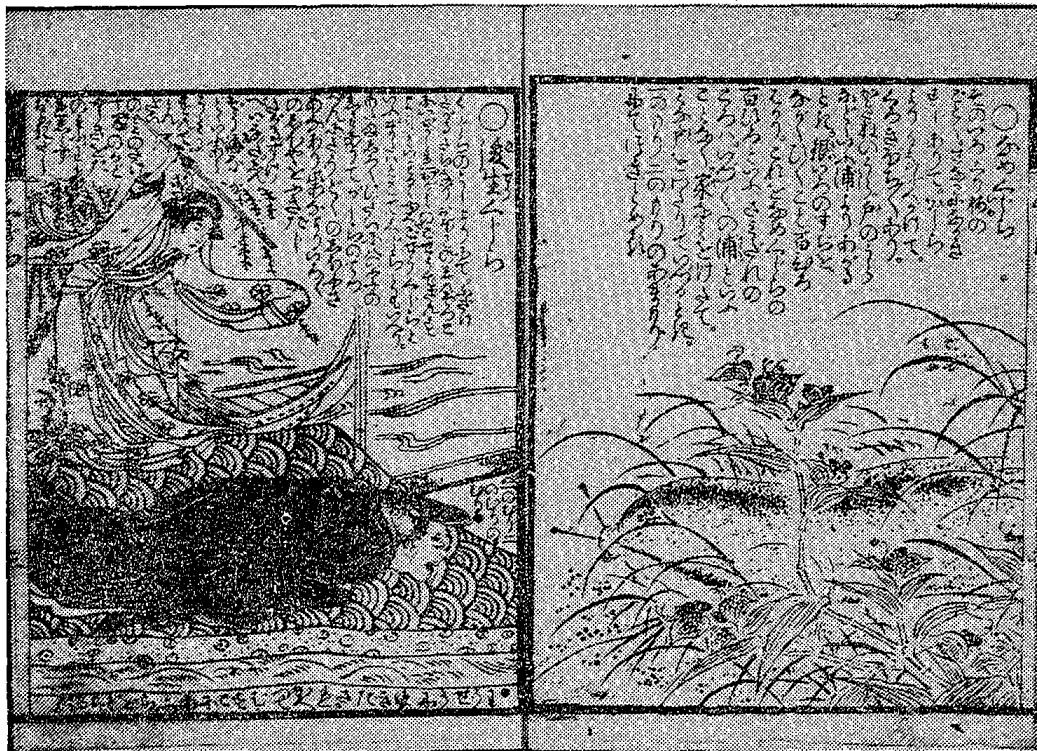


○なめくじら

その色くり梅のごとく。せなかに長き筋ありて。頭よりうなじへかけて。黒きぼち／＼あり。垣根のうら。戸のうらなどといふ浦より上るとき。銀いろの筋を。長く引くこと百尋ばかり。これをなめくじらの百ひろといふ。五月雨の頃は。いづくの浦といふことなく。家なみをけたて。みな戸をわたりていづる時。一のもり二のもりの雨もりにて突止める。」

○後生くじら

くじらの年寄にて。ふざけたがる性なり。おぼこの新造子に厭がられ。拝みの後生でさんすよ引と言わる／＼ゆへ。後生くじらといふ。またはとこでくじらともいへり。頭白く額に八の字のしわありて。頭の天辺に。瘡毒のしほふき穴あり。此穴よりいろ／＼のしほやを吹出したがる。すけべいなだ。しんぞう海など／＼いふ荒海にすんで。身代の身のたけ十間の角屋敷をたのみに。われしらず泳ぎだし。一のもり二のもりの無理往生に突出され。かへつて息子に油を取られる。



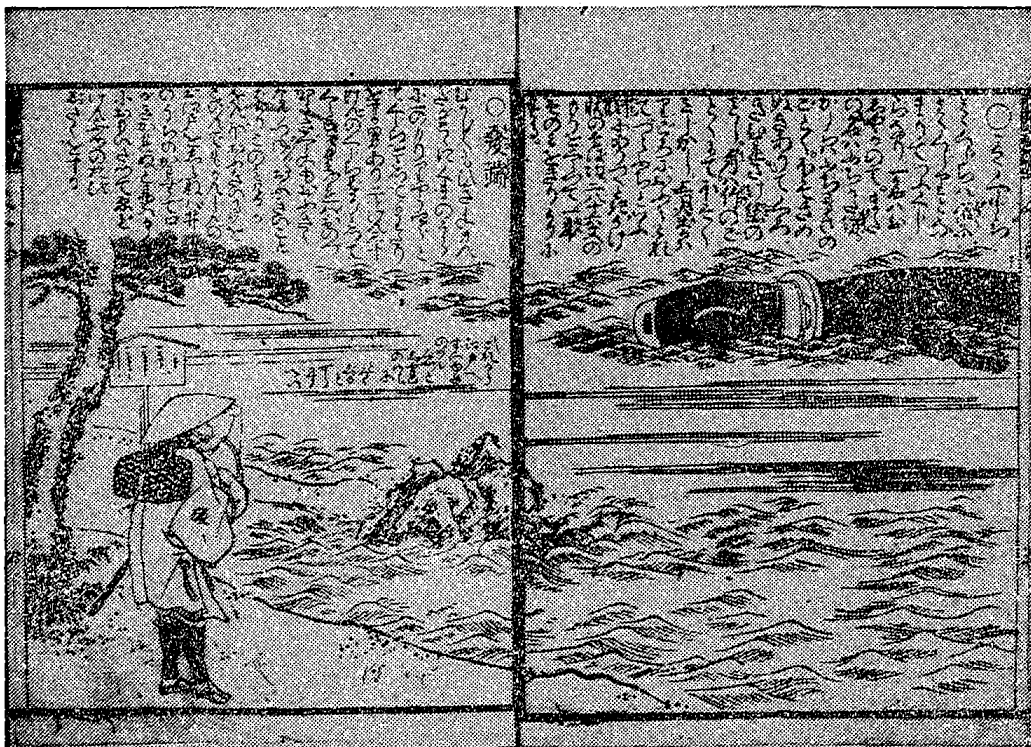
○みくじら

みくじらは俗にみくじりとなまりていふくじらなり。一名はおしやかのて。またの名はふちかた坊。頭はふぢまきのごとく。細き目貫ありて黒きひれ。下緒のごとし。身は竹のごとくにて。細く短し。三月出替ごろに多くとれて。つらふちといふ洩にありつくとき。うけ状のそば切。二八十六文のもりをくらつて。一年そのみを切売にする。」

○発端

むかしくも久しいもんだが、こゝに熊野浦に一のもりりやう四郎とて鯨をとつて世渡をする男あり。二十けん三十けんの鯨ばかりとつて暮す事なれば、自ら氣位も大きくなり、つねく大きいことばかり好みたるが、なんぼ大きい事を好んでも、肝腎のお江戸を知らねば井のうちの蛙で口が利ぬと、俄に思いたつて江戸見物の旅支度をする。

「これから江戸へずいゆきのソレぐつとしやこの飯にとろ汗とやらかすべい。」





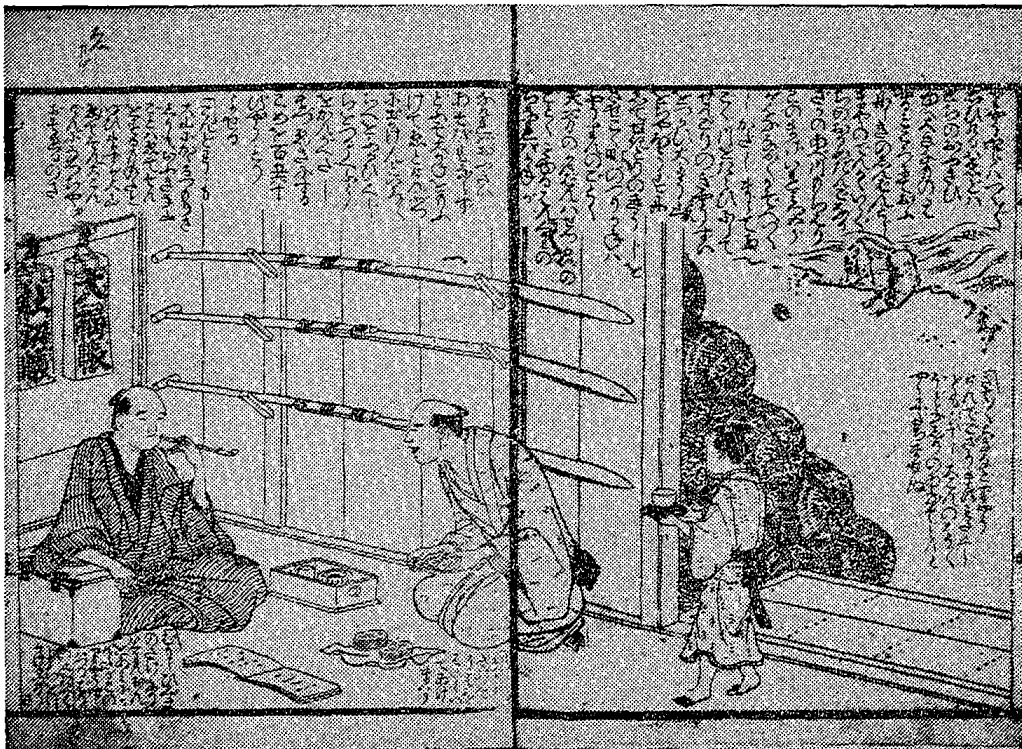
〔四ウー五オ〕

りやう四郎はつく／＼思ひけるは、江戸は土地の大きひ故  
 大きなものゝはやる処にて、大錦の新板、豊島屋の田楽、飯  
 倉のおかめ団子、中坂のあべ川餅、張子の齧入、みつ五郎が  
 鼻、なか／＼数へ尽し難し。まして両国川を盟にして千垢離  
 の行水をつかひ、大道山を茶坊主にして閑取の給仕をさせ、  
 石町の釣鐘は風鈴の如く、天一方の看板は石灰の如くみゆる  
 繁華の地なれば金か」なければ大きい遊びもならず、どふぞ  
 大金を儲て江戸見物に出かけんと、いろ／＼知恵をふるひ、  
 鯨をつる工夫を考へだし、先餌にする米を百五十俵とりよ  
 せる。

「こんどわしも大山にかゝるつもりさ。しかし大きな山ご  
 とはゑて損をするものだといひますが、大山ゑてそんな大権現  
 になつちやアおそれるのさ。」

「さて／＼大きな御量見でござります。私共は千大根  
 のはり／＼ほどな尻のあなで、とんと役にたちませぬ。  
 「おなじみだけ相場を働いてあげます。」

〔四ウー五オ〕



へむかし檜前の武成は観音を綱にかけたが、このりやう  
四郎は釣針の先へ鯨を引かけるつもりさ。

〔五ウ〕

餌にする米はできたが肝腎の針がなくてはならぬと、近所の鍛冶屋を頼て鯨をつる針を拵へさせる。一丈八尺にして張飛が蛇棒より太く、重さは関羽が青龍刀の如く八十二斤に詭へる。その形親舟の碇を引割たるが如し。一寸もち歩くにも車力の五六人も要る出入なり。

へ大きい針だといつちやあこけがあげるようだが、阿房宮のゑび錠でもこれほど大きくはあり申すめへ。ばかしくしい。

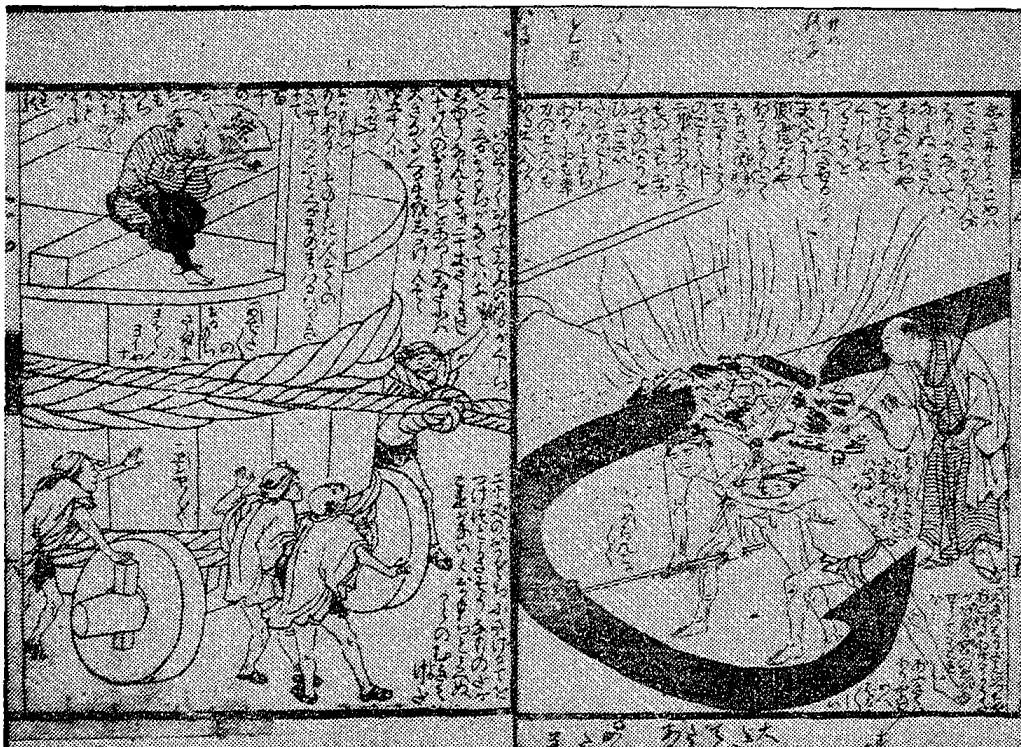
へ針ほどな細工を棒ほどにあつらへるとは此事だろう。

へがらんこウーウー。

〔六オ〕

鯨の道具大方そろいけるが、鯨を入れて帰る岡持がなくては不自由ならんと、高さ二十丈さしわたし八十間の岡持を詭へ、

〔五ウ〕 〔六オ〕



下には大きな車をしかけ、人足四五十人にひかせる。岡持おかもちを持歩くその時は、人足の木遣の声と車の廻る響にて、百千の雷も一度に落かゝるかとうたがわる。

「めでた〜のおかもちさまよの、ヨイ〜ヨイヤナ。

「エンヤ〜」。

二十丈の岡持に提る手をつけずとよさそうなものだが、これがないと岡持と見ぬからのむきみ汁だ。

〔六ウー七オ〕

かくてりやう四郎は八百五十俵の米を大釜にて飯に炊せ、鯨は鰯を好くもの故、二三十万めしの中へつきませ、上から酢をふって鮓のごとく漬合せ、浜辺に足代をかけて百五十表のめしを焼飯に拵へさせ、その高さ高田の新富士もはだして逃げ、大人国の夜食の固りもかくやと思ふばかりなり。

「蒸し飯て山かできた。山の飯はおれ一人もすさまじか

〔六ウー七オ〕



ろふ。

こうもあろうか？とぎやらぬ米は富士のねいくはいか夜食まだらに飯はくへつ。おきやあがれ、こけつけた。こじ付といふ所を飯だけ焦付と地口ておく。

へこふせんぬきを斜に構へたなりは、野郎の舟幽霊といふもんだ。

へこの二三日は飯が鼻へつかへて、とんと食気がござらぬ。どふぞ飯をみずに暮したいものだ。

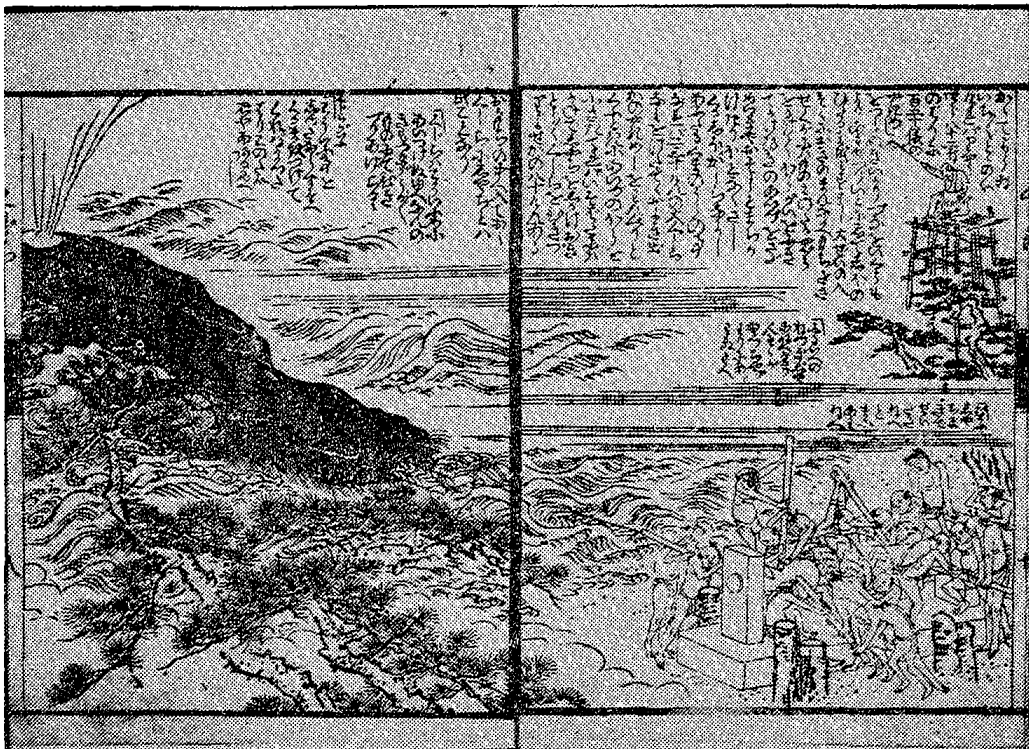
へけふで三日火をたいている。火たきのおめしにさんち三夜が、あきれもしねへ。

へソリヤめしよ。

〔セウー八オ〕

かくて用意いちく調いければ、りやう四郎八十二斤の針に百五十俵の焼飯をつらぬき、碇綱をいくらかも縫合せ、釣糸にして、汐の干たるまを見済し、大ぜいの人足に沖の真中へ持出させ、陸には物見の高櫓をかけて、ほら貝をふきて駆引

〔セウー八オ〕



の合図<sup>あいづ</sup>を定め、いまやおそしとまちかけたり。ほどなくさし  
くる潮頭<sup>しほがしら</sup>、名にし負<sup>あふ</sup>たる熊野浦<sup>くまのうら</sup>の事なれば、二三十間の大く  
じら波<sup>なみ</sup>をけたて、泳<sup>およ</sup>き出、かの焼飯<sup>やきめし</sup>をわんぐりと食<sup>く</sup>ふ時に、  
合図<sup>あいづ</sup>のほらを吹立<sup>ふきたて</sup>れば、磯端<sup>いそはた</sup>には予<sup>かね</sup>て鯨<sup>しやち</sup>をしかけおき、とう  
く鯨<sup>くじら</sup>を引<sup>ひ</sup>つりよせ、かの八十間<sup>へん</sup>ある」岡持<sup>おかもち</sup>の中へ入てお  
く。くじらにしやちとは此事<sup>このこと</sup>なり。

「鯨<sup>くじら</sup>はこういふめにあいつけぬゆへ、何<sup>なん</sup>の気<sup>き</sup>も付<sup>つか</sup>ずうか  
くものにてひきづりあげらるゝ。

くじらがいふ「こういふ事としつたなら、すそへ車<sup>くるま</sup>をつ  
けてくればよかった。張子<sup>はりこ</sup>の鯛<sup>たい</sup>じやあるめへし。

「古家<sup>ふるいへ</sup>の根継<sup>ねつぎ</sup>じやあねへが、コウ人<sup>こうじん</sup>そくがかゝつちやア  
割<sup>わり</sup>にあわぬわへ。

「むかふしやちまきで精出<sup>せいだ</sup>さねへと間<sup>ま</sup>にあわねへ。

〔八ウー九オ〕

りやう四郎<sup>くろう</sup>が工夫<sup>くふう</sup>にてとうく鯨<sup>くじら</sup>をつりはつゝたれども、  
諸道具<sup>しよどうぐ</sup>や人足<sup>そく</sup>に金<sup>かね</sup>がかゝつて一匹<sup>ひき</sup>ぐらゐの鯨<sup>くじら</sup>ではあまり面白<sup>おもしろ</sup>

〔八ウー九オ〕





くもなけれど、今まで鯨を生捕にしたといふ話もきかぬ事なれば、こいつをみせ物にしたらばはやりそうな事と、俄に思ひつき、十町四方に池を掘り、生た鯨をみせければ、案の如くこれは珍しいと聞伝へ雲霞の如く見物が集り、大金をもうけた上、後は売つて金にする。あんまりうますぎてもたれそ  
うなはなし也。

へ生捕たくじらをごろうじろ。高さが八間にさし渡しが三十一間ござりますぞ。売据のはり札じやアあるめへし。

へいきているという事だが、ほんのことかしらぬ。

へ鯨汁でさへ一杯十六文がものはあるに、いきたくじらをはした銭でみるはやすいものだ。

へめづらしいことだ。

〔九ウー十オ〕

りやう四郎今は思ふまゝに金をもふけ、さらば江戸へ出て楽まんと夜を日についで江戸へきてみれば、きくしにまさる江戸の大きさ、中く鯨を針で釣たやうな小さい量見からみ

〔九ウー十オ〕



ては、灰吹<sup>はいふき</sup>から蛇<sup>じや</sup>をだす太平楽<sup>たいへいらく</sup>、小ゆびの先<sup>さき</sup>で三番叟<sup>さんばそう</sup>をふま  
せるたゞき合<sup>あひ</sup>、三間<sup>げんまぐち</sup>間口の長屋<sup>や</sup>へ連尺<sup>れんしゃく</sup>をかけてしよつて歩く<sup>ある</sup>  
大悪態<sup>おふあくたい</sup>、きくにつけ見るにつけ、肝<sup>きも</sup>の潰<sup>つぶ</sup>れる事ばかり、助六<sup>すけろく</sup>  
がせりふにも、まげの間<sup>あいだ</sup>から「安房上総<sup>あわかつさ</sup>をみせ、鼻<sup>はな</sup>の穴<sup>あな</sup>へ屋  
形船<sup>かたぶね</sup>をけこむとは、どんな大きな顔<sup>かほ</sup>の人であらうとしきりに  
うら山しく思ひけるが、江戸では金さへたんともつて人に貸<sup>か</sup>  
すとだん／＼顔<sup>かほ</sup>が大きくなるときゝ、これ倅<sup>さいわい</sup>とこくうに金を  
かしかける。

「あるようでもないものは借金<sup>しやうきん</sup>、ないようでもあるもの  
は銭金<sup>ぜにかね</sup>にて、尋<sup>たづね</sup>るときは金の借手<sup>かりて</sup>もないものでござる。

「イヤモウみておるうちお顔<sup>かほ</sup>がだん／＼大<sup>おほ</sup>きくなりま  
す。とんと飴細工<sup>あめさいく</sup>のひやうたんときております。

「あなたのような借際<sup>かりぎわ</sup>のきれいな、受取際<sup>うけとりぎわ</sup>にしびれをき  
らす金主<sup>しめ</sup>はとんどござりませぬ。

「きさまの目<sup>め</sup>にもわしが顔<sup>かほ</sup>が大<sup>おほ</sup>きくみへますか。みへず  
はもふ十両<sup>じふりやう</sup>かしませうから見直<sup>みなを</sup>してみてくださいへ。

〔十ウー十一オ〕





〔十ウ〕

こゝにりやう四郎に釣れたる鯨の悴は、父の大きくら鮒やどぜうをみるやうに釣針にかゝりて命を失いし事を無念と思ひ、何とぞ敵りやう四郎を討て此はぢを雪がんと、龍宮の親玉八大龍王へ敵討の願ひをいだす。

つくじらは伊勢熊野西国の外、徘徊ならぬ身分なれども、孝心に免じ入海舟付の通り切手を下さるゝはありがたくおうけあれ。

つたとへ此みはさいのめに切りこまざかれ、牛蒡汁にならとも、敵をうたいでおきませうか。

〔十一オ〕

くじらの子は敵の行方を尋ねけるに、此比りやう四郎が江戸へいでたと聞出し、あとを慕うてたづねくる。

つさしてゆくしほのなみだとながれよるめほどに細き月のわの熊野をあとに我ながら貧乏鯨のひとり旅、じれては肝をいり海の、その百尋にまだたらぬ、五十三次たどりくる、東

海道からあばら骨、いつか敵に大もりの森に命はおとすとも、わが名な里ににぎわひて、八つ山出るのり合の其舟賃も高輪にゆききは引もきらすじる、ごぼうをいれて鯨身の夜食の菜に品川や、宿のあなたに着きにけり。

つ田まちの反魂丹も頼まれたが、そんな事は流して諸事しんまつ坂でしやれることだ。

ついかぬおとし咄か、つくられるにはおそれるぞ。

つついでに芝の嵐亭子へも訪れませう。たしか十日は石庵のほつく会だといふことだ。

〔十一ウー十二オ〕

りやう四郎だん／＼と顔が大きくなり、今は一間のはいり口へは出入しにくひ位になりければ、此上はかした金の利をなきものにしてしやれのめさんと、大みなとやの七浦といふ女郎になじんでゆく。七浦も随分手のある女郎なれば、客人が大きい事が好とき、座敷の真中へ二けん四方の盃台をなをし、かべちよろの大夜着を打掛にして出ければ、客人は顔が大きくて体が小さく、女郎は首が小さくて体が大きく、両方の首をすげかへたらは人間並になりそうな事にて、盃と女郎の体にせきをとって廿畳のいちざ座敷でも客人の顔は半分廊下へでている。

「しげのどう、はしごをしつかり押へなせへよ。客人にさかづきをとつてあげるから。」

「もしへ、もつとこつちへおよりなんし。主の顔が邪魔になつて、ろうかの往来がとまりイス。」

「わつちがなりをみておくんなんし。煤掃のやぐつゝみほどおつす。」

〔十一ウー十二オ〕



へなかく大きい女郎たはへ。まへのたき川といふところがあるわへ。

〔十二ウー十三オ〕

廿畳三十畳敷の座敷では肘が悶へて窮屈なればせめて二三千畳敷の小座敷でゆつくりと遊んでみたひといろく工夫をして、三月の節句は品川沖の汐干をさいわい、干上つた海の実中へ四五千枚の毛氈を敷並べ、青空をば張天井の如くに思ひ、安房上総の遠山は掛物、山水と眺め、梢におふ八ツ山の花は床の間の活花にして、はるかにみゆる本牧の「森は台の物」松かと疑い、その有様宿無の涼のごとく、みなく野天で大きな事ばかりいつている。

へしほがきたら流の身になりいすとき、それぢやア苦界の里じやアなくて、ふかいのそこでおつすねへ。

へいま足へさわつたはたしかかれいでおつせう。逃しいしてはなりいせん。なんでも二階へ引つりあげなんしと、きやくじんあしらいもするやつさ。

〔十二ウー十三オ〕



「モシくこゝじやア禿のしゝみつ貝や新造のおぼこが  
たくさんとれやす。

「汐干にきて女郎かいを拾わせるもありがたへ。

〔十三ウー十四オ〕

かゝる処に今までの青天井も俄に黒天井となり、大あめ車  
軸を流しければ、りやう四郎は野郎の俊寛をみるごとく舟よ  
くと焦りつゝ、龍宮へいつた猿が肝を干ておいた如く呆然  
として「いたりしが、遙か沖のかたに大なる座敷あつて中に  
は緋縮緬の三ツぶとんまで敷ておきければ、天の与へと我勝  
にこのざしきへ走りこむ。

くじらがいふ「口を開つめにしているも大儀なものじ  
や、畜生めらが繁りくさるやつさ。

「りやう四郎に釣れたる鯨の子は、けふこそ本望を達せ  
んと、朝から口をわんとあいてまつている。

「なんだかこのざしきはなまぐさいようでおつす。たし  
かにねこがやきものをひいてきたのでおつせう。

〔十三ウー十四オ〕

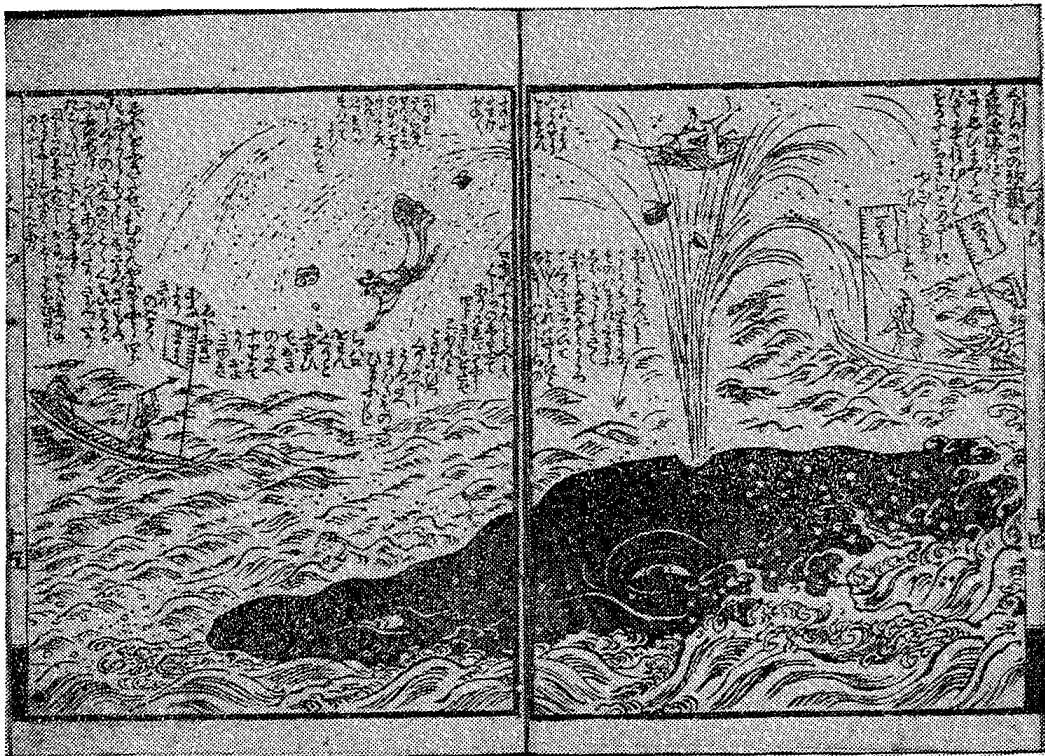


くじらが又いふ「おれも白く生れつけばよかった。刷あ  
れが多くでるといつてさぞ板刷がこごとをいふであらう。」

「十四ウー十五オ」

くじらの口の別世界も合歓欲海の奥座敷と思ひ、枕を高く  
して眠らんとするに、忽ちこの座敷ゆさくと揺出し、これ  
は地震か震動かとうろたへ廻るその隙に俄に潮がさしてき  
て、山ほどな大波か打てくるに気がついて、よく／＼みれば  
座敷と思ひしは鯨の「口穴、ふとんと見しは鯨の舌にてあり  
ければ、りやう四郎肝を煙草盆と共にひつくり返し、うろた  
へ廻るその隙に鯨は口をわんぐりと塞で沖の方へ十里はかり  
泳ぎゆき、汐吹穴より霧の如く汐を吹出せば、むざんやなり  
やう四郎も七浦も銚子も盃も水機関の玉の如く、雪居はるか  
に吹上られ、上つたり下つたり、たこ／＼ひだこに異ならず。  
くじらの汐吹からおかめがで、は、祭のばか囃子とい  
ふもんだ。道理で武蔵野へ出車といふみへがある。  
「これがほんの天井をみせられたのだ、助け舟／＼。」

「十四ウー十五オ」





「七里さんはいなんせんか、袖の梅をふりだしてくんな  
んし。いつそ目がまはつてだくくしいす。」

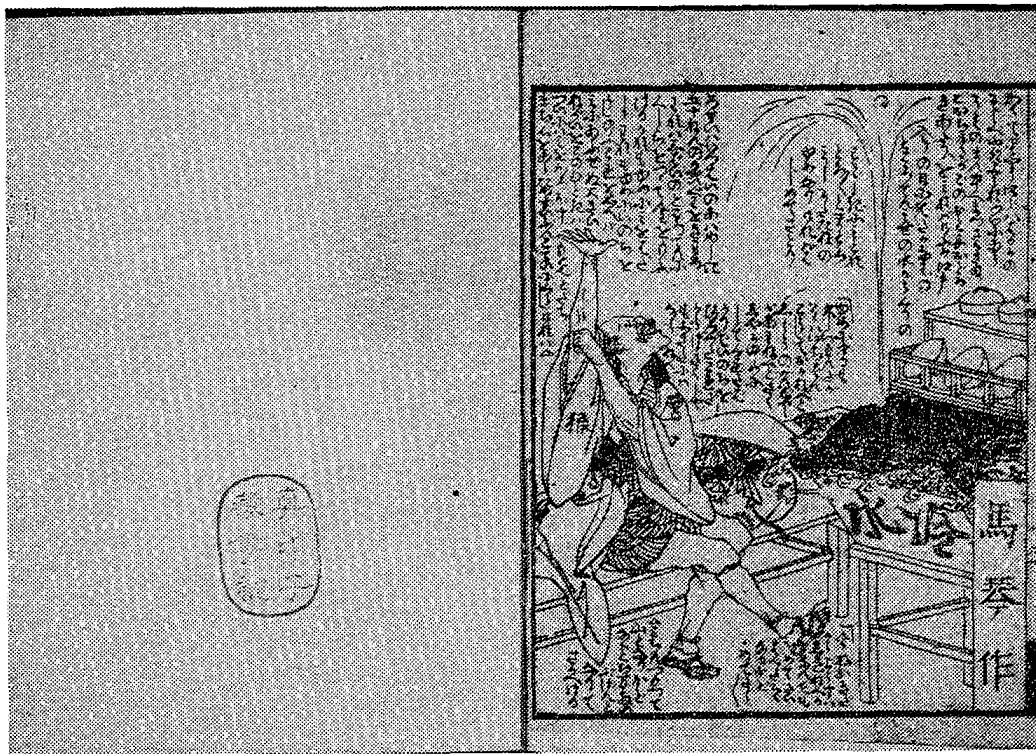
〔十五ウ〕

かくてりやう四郎は、はるか空へ吹上られ、ついに荒海  
のまん中へまつさかさまと落けるが、この音に驚き辺りをみ  
れば、けふが江戸入りの日にて、高輪の心太店の水からくりの  
涼きにみとれ、とろくまとどろみし転寝の夢なりければ初  
めて悟り、盧生は一杯の粟飯に五十年の栄華をきわめ、我は  
三ばいの心天に鯨をつつて金を儲ける。かれも夢に身を果し、  
我も夢に命を失ふ、これを思へば身に应ぜぬ大きい願をこの  
む時は遂にはみを滅すもと也と、忽ち心を改めずいぶん小体  
に暮しければ、みぢん積つて山となり、ほどなくとち万両の  
分限となりて栄へける。

「ゆめにするも久しいもんだが、こゝは一番こうしてお  
かねへと始終の勘定が合ねへと、作者が夢にしてくれたば  
かりで命を拾つた。これだから戯作者も不沙汰にはならね  
へ。」

馬琴作

〔十五ウ〕



# 彼岸桜勝花談義

〔一才〕

（振り仮名・句読点は原文のまま）

実相无漏の日待の飯には。正覚の腹を肥し。随縁真如の月見の酒には。無名の酔を醒す。世帯仏法腹念仏。煩惱ぼたもち一切くふべく。米は菩薩の号を免し。銭は阿弥陀の光を増す。財宝十万億両の金箱も。般若式朱分の利益より起る。他力奉願の阿徳意達。高座の側へ間ぢかく寄て。ゆるく注文さつしやりませ。相場の施主につかつしやりませう。

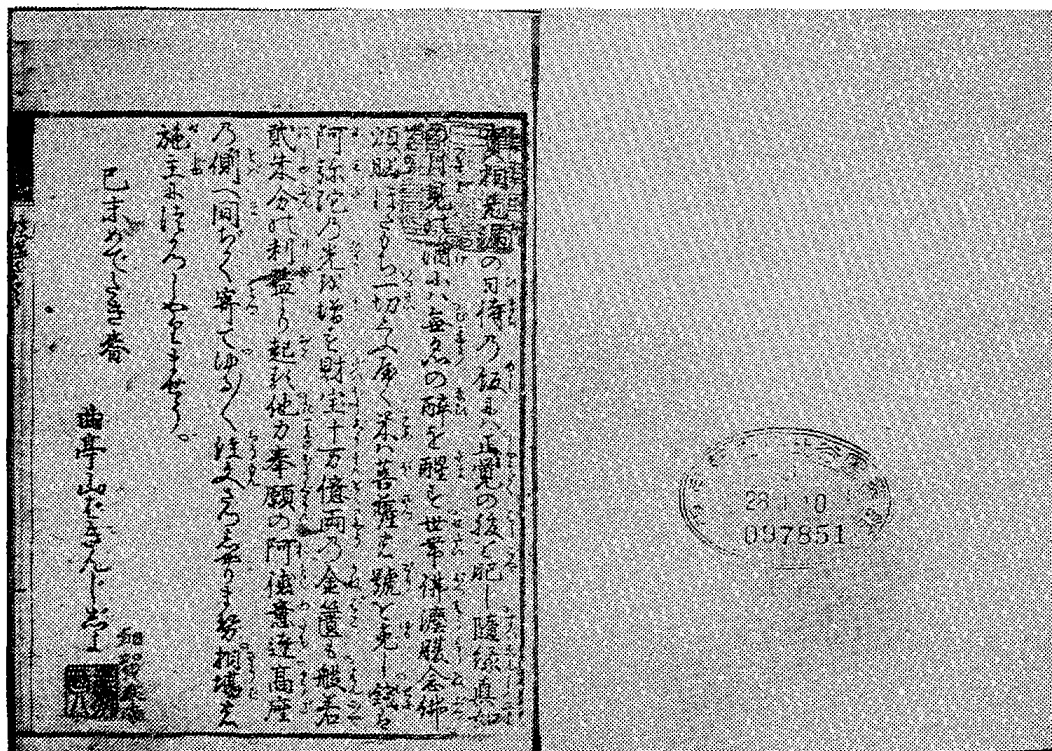
已未めでたき春

曲亭山ばきんじじよ

〔二ウー二オ〕

《版元》つるや喜右衛門御慶申入ます。《作者》コレハはやくと忝けのうござります。先以てお揃いなされ、御安全に御超歳なされまして、めでたうぞんじます。《板》モシくそれではどうかよう文章をよむようござります。時に

〔一才〕





初春早々御催促を致すやうではござれど、当年は何とぞ日永のうちに種本をお渡し下されまし。日短になりますと心ぜわしく手まはりかねて困ります。《作》なるほど至極御尤もでござります。当年」はどうぞ手廻しを致して早くたね本をお渡し申ませう。先ちよつと未の春の新板三冊物、世界をお話し申そう。《板》それははいお手廻し、シテ筋は何でござります。《作》筋は古めかしうござるが、地獄極樂の世界を世の中の事に致して随分めでたく書くつもりでござります。《板》ソレハおもしろそうな趣向でござります。ちとお話しなさい。《作》先お上下でもおとりなされませ。コレお吸物を早く持てこい。

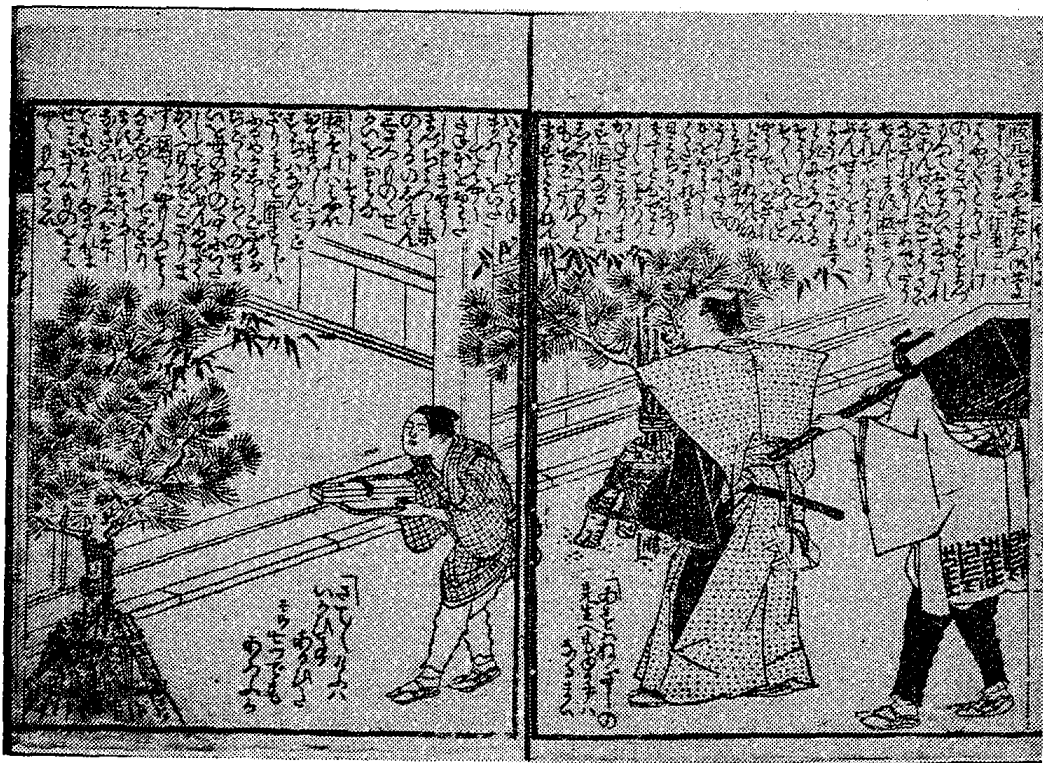
「あすは根岸の先生へも行ずはなるまい。

「さてくけふはいかひ事歩ひた。モウ七つでもあろふか。

〔二ウー二オ〕

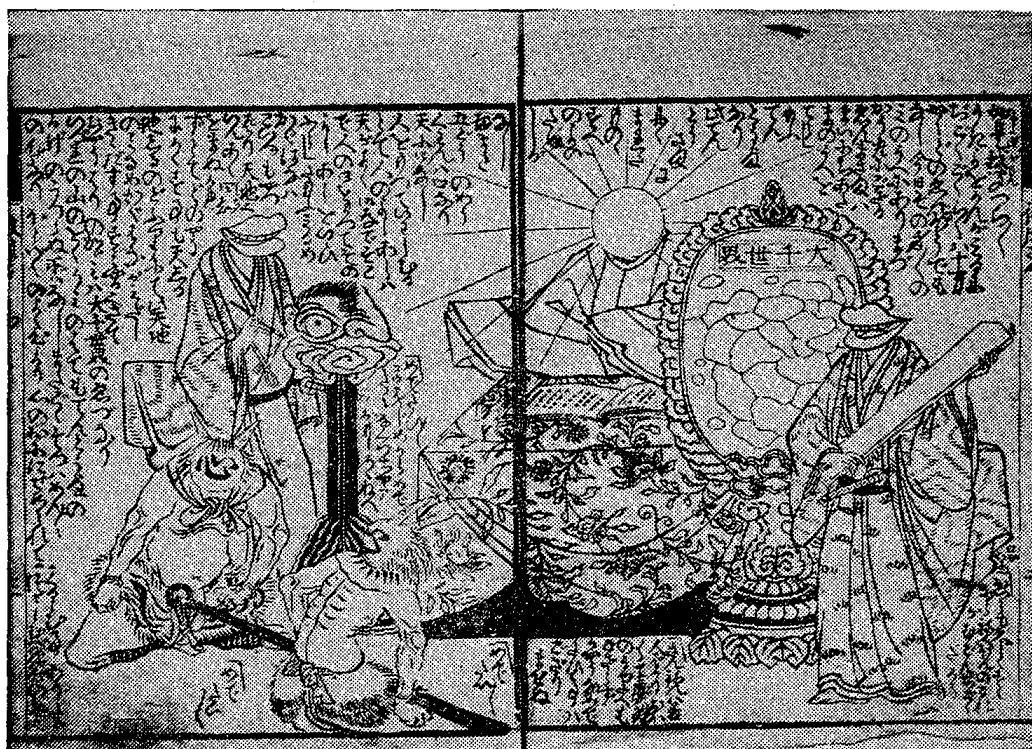
如是我聞つらく、浮世を鑑るに、地獄極樂は十万億土の遠

〔二ウー二オ〕



方でもなし。今日その身くの身上にあり、先高座にござる  
 閻魔様は毎日頭の上を照し給ふ天道様なり、此天道様に憎ま  
 れた者ゝ末のよい例が「なし。扱また五道の冥官は口なり、  
 天に口なし、人をもつて言しむるとて、人のよしあしは天が  
 よく御存で、そこで人の口をもつてその善悪をいひふらし給  
 ふ、視目嗅鼻は、こいつもやつぱり天地也。陰悪四知を免れ  
 ずとて、どのやうに隠す事も天しる地しるの道理にて、此天  
 地の視目嗅鼻が見出し聞出す事速か也。さて浄玻璃の鏡は大  
 千世界の絵図なり。何れの山の奥、海の果も天道様の影映ら  
 ぬ所はなし。また獄卒は面くの心なり、欲いくの欲心よ  
 り心の鬼に責られて苦む事あり、たゞ慎むべきは心の鬼也。  
 へめでたひく、コウ始からめでたくなかつちやアおも  
 しろくねへ。  
 口がいふへおいらも久しく酸くならねへ。これがむごん  
 ぢごくだろう。  
 へ近年は善人ばかり多くて虞芮の訴へもござらず。かや  
 うなめでたひ事はござりませぬ。

〔二ウー三オ〕



へめでたいく。

へめでたいく。

〔三ウー四オ〕

《げいのかわらの師匠菩薩》 芸の河原に立せ給ふ師匠菩薩と申奉るは、毎日多くの子どもを集め、五ッや六ッや八ッさがり、十より十五の幼子が、一字をかいては我身のため、二字をよんでは其身のためと、読書算用の功を積む、これ師匠菩薩のおかげ也。この菩薩の御事を人みなせんせいくとよぶ故に先生しせうぼさつとも申なり。

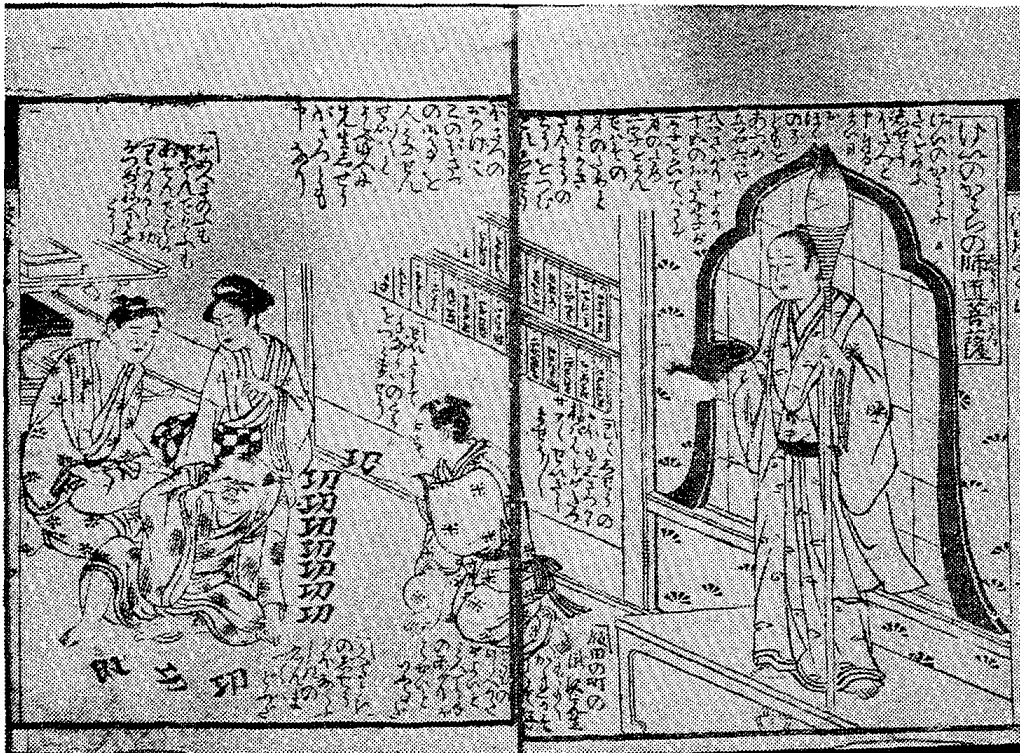
へお前昨日も休んでけふも遊んでばかりいるから功お積みねへわな、こう。

へコレくしせうの顔も三冊書ねば腹が立つ。サアく精だませう。

へ精出して手習の功をつみませう。

へ飯田の町の滝沢先生もよくかゝれる。そして子どもの教へ方がよいとみへて、手の上りが早いといふ事だ。

〔三ウー四オ〕



へ帰る時のしせう顔、習ふ時の闇魔面はどふだ。

〔四ウー五ウ〕

《三途河伴頭さま》

さんづ川質の流れに立せ給ふ三途河の番頭様は、百に四文の御利やくありて、人の身の皮を剝取り給ふが御商売也。僅か咽三寸を肥さんとて当もなひ大酒をのみ、または一寸先は闇の夜の鉄砲を放したがかり、己が身の楽みより着物ゝつまやぬの子どもを」観世縊の縄目にかける。しかしてこの手合、毎晩湯屋で念仏を申た功德にて浮む事あり。毎日四文銭八ほんの法華経をよむべし。

へ論語読論語知ずの孔子縊が一ツ、神道者の無信心で高天原にかみ入が二ツよ。

へ丸裸の文五にまつぱだかそうこういんの通をもつてきやした。

へ身の皮をはがれて面の皮が厚くなつた代りに、嘘の皮が上手になつた。これで三途河の勘定もあふといふもんだ。

〔四ウー五オ〕



「イヤハヤ功德くどくといつては番頭ばんとうをくどくよりほかはござらぬ。

〔五ウ〕

《高利こうりのぢごく》

あまり欲よくどうしく高利こうりを貸かして証文せうもんの書替かきかをしたがる親父おやせは、折角せつかくためた銭金ぜにかねも息子むすこの阿房鳥あほうからすに目めを抜ぬかれ、蔵くらの金箱かねばこはいつしか空からぼうになりて、徒らいたうに瞑恚しんいを燃もす。これ（あいし）を愛子あいしのからすくら金かねのかしを失なくして両しんめがけとびかゝるとはもうすなり

「此嘴くちばしでおやぢの目玉めだまを抜ぬせちやアやつたやうじやアねへ。

「また阿房あほうめが空からにしをつた、まことに道楽どうらくな子こはもつべ鳥（からす）た。

〔六オ〕

《異見地いけんぢごく》

いけん地獄ぢごくへおちる人は伯父鬼おぢおに叔母鬼おばおにに身みの油あぶらを取とれ、甚はなはだ

〔五ウ〕 〔六オ〕





しきに至りては門口の出入を止られ、きうり鳥といへるとりにつゝき出され、七生までのかんだう蛇という蛇におひかけられ、遂には知辺の方を迷ひ歩く。此ときはやく一心の宗旨をかへ、旦那寺のしんぼう上人を頼て託事せされば一生無縁の渡り者となりて、さらに浮む事なかるべし。

へ役にもたゝぬ稽古所は入りをしたがるから、この舌をぬいて三み線のねをとめるがよふござる。

へこうまでいつて油がとれずは、せき口の水車にやつて絞らせよう。

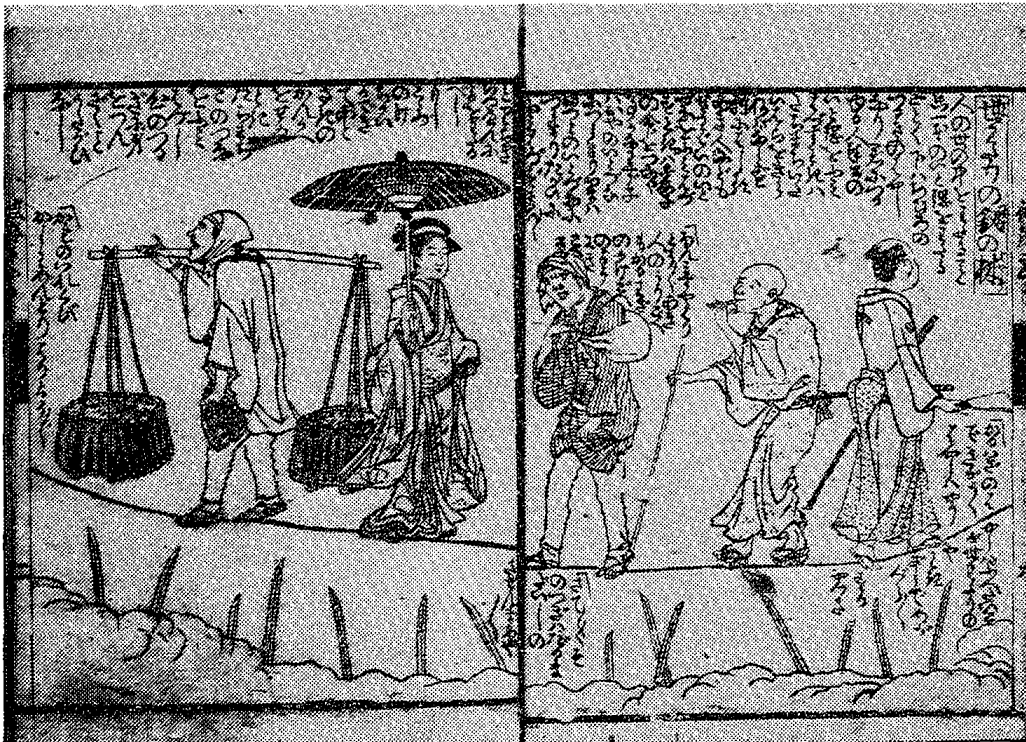
へアゝあやまつた稲荷様、只今までのふ孝明王、たすけ給へく。

「六ウー七オ」

《世わたりの剣の林》

人の世の中をわたること只一本のいと綱を渡ることく、下は千尋の剣の林なり。君に仕る人奉公のいと綱を踏外すときは、

「六ウー七オ」



忽ち痛い腹を切ねばならず、利に走る商人なども商売の糸綱を踏外すときは吾妻子の命をつなぐ事かなわず。子は親の糸綱に掛り、妻は夫の糸綱に掛り、互に踏外すまい」とと律儀一遍によをわたるべし。もし心のけちかいかできて跡先の考へをせぬときは、忽ちこの綱を踏外し、心の剣に身をつんざくこと疑ひなし。

鴨の入首かしわ牝鳥はりとうく。

へほんみすやはりとぅく、商人の売声も軽業の掛声のようにきこへる。

へ軽業のはやしは笛太鼓で気がうくが、世わたりののはやしは槍や脇差で目がぐらくするやつさ。

へさてくく、その次は達磨大師の座禅豆やく。

〔七ウー八オ〕

《物前の火の車》

身分不相応に奢り散し、飲食に銭を使つてのらくらしたかる者ゝ報は、借金乞の八百やの青鬼、米やの白鬼、炭や薪や

〔七ウー八オ〕



の黒鬼共か、此火の車にて銭金の迎いにくる。此車の両輪は月と日にて、これをひく者は月日の鼠なり。晦日と廻り」節句と廻り、盆とまはり暮とまはること下り坂より速かにして、此とき身上燃興となりて、いくら鉈をとり直しても自由にならず、惣身からぢり／＼汗を流し、あまり苦しさのあまり借金きんの洩ふちへはまりて涼んとすれば却て高利にはたられる。てびあびぢごくぞおそろしき。

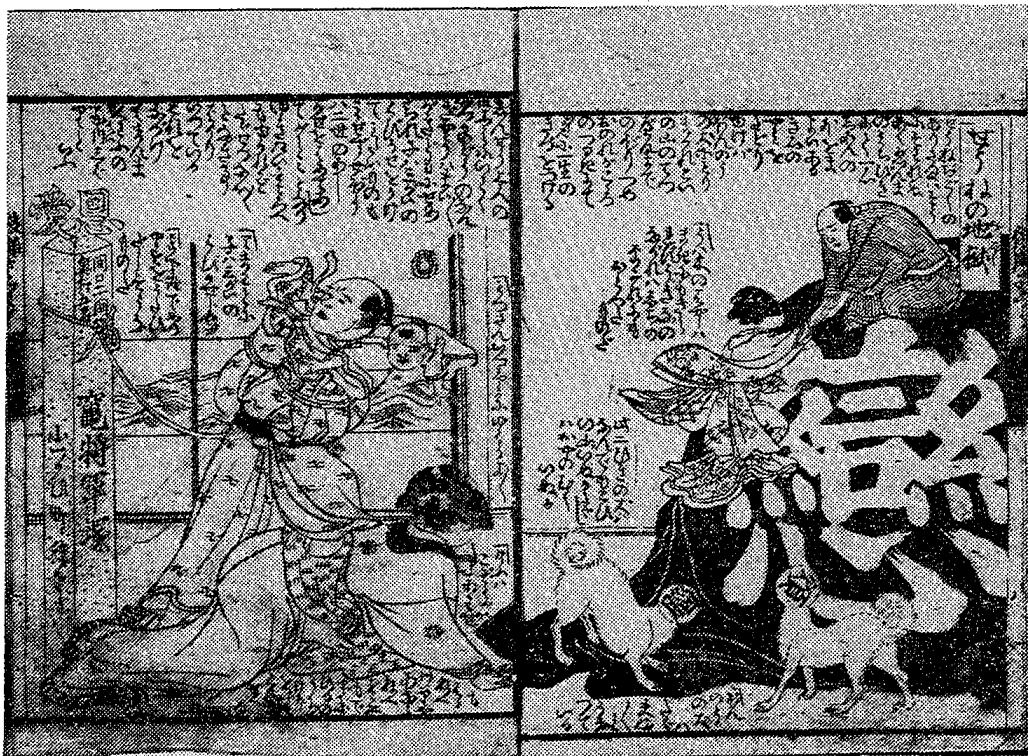
「亭主の油をとつて車の軸へぬると別して廻が早くなる。ソレまわつてきたは、まわつてくるは、これではどうか外郎売のせりふのよふだ。

「亭主はへいきの清盛、かみさんはおどけ御前とみへる。

「マアゆき廻つてきさつせへ。廻ぬものは首ばかりた。

「あまり奢の判官が過たからの事だ、横にくるまをいわずとよこしたく。

「八ウー九オ」



「ハワー九オ」

《せうねの地獄》

せうねぢごくの有様は添うに添れぬ悪ゑんまの導きにて、一心思案の外を迷い歩き、心の闇を辿りゆけば煩惱の犬にとりまかれ、恋の山のとつぺんまで上りつめ、己が心の剣にて身に一生の傷をつける。」

しんせう上人の御ふみに曰く、厄介道の難行はまいゝ餓鬼共に責られ、子は三界の首枷をかけて、みたいものも見せず、女房は二世の足枷をはめて足手絡みとなり、ゆきたい所へもゆかれず、たゞ切ないゝと泣事ばかりいつている。これをなづけてまんまくわふの案内しぱりといふ。

へうは木の林は薪にも切れず、浮名の流は質の流にもおとつたものだ。

此二匹の犬はなんでも恋の山いぬか、たゞしは親のむくいぬか。

へぼんのうの犬はたゞ夫婦ゝとうなつてゐる。

へとつさんいつしよにゆこうよく。

へけふは小僧が袷も張ねへけりやあならねへ。どこへも出ずに昼のうち守をしてくんなせへな。

へアゝまことに子は三がいの首かせじやナア。

へモウ下座でめりやすを唄ひだしそうなものだ。

「九ワー十オ」

《ならくの床の曲輪裂》

ならくのところに墮たるものは、十二因縁の禿立から廿五ぼさつの年明まで、身は切売の鯨の如く、一つ体を三つにも四つにも切こまぎき、てのあるやつにわ指を切、首きり嵌れば髪を切る。その包「丁は小判にて、因果忽ち廻りやく、黒ひ羽織の黒鬼客、騒ぐは修羅の太鼓持、苦みたとへんものものなし。この苦痛みうけ上人よりくがい十念を授りて浮むことあり。

へうでのほりものなら十両く。

へこしからしもなら三分く。

へ目元から鼻筋が千両く、こういって夷講のうりか

いのよふだ。

へ先すじを付て値をしなんし、此比はそんな相場はおつせん。

へこうしたところは置さしといふみへもあるわへ。

〔十ウ〕

《痔の池》

ぢの池は極樂の肛門より四里あなた、亀の尾の下にあり、とわたりごとの如き流あり。荒神様を崇あがめずめんくの釜かまを粗末そまつにする人このぢの池に墮おちる也。釜といふものは今日命をつなぐ飯めしをたく器うつわなればおの字をつけておかまともいふ。そのおかま

〔九ウー十オ〕





を人にかしたり人にうつたりすればこの苦みあり。もつとも  
慎むべし。

「わたしはだるまさんへ願かけをして、一生九ねんぼう  
を絶つつもりさ。」

「このどうわたしが釜を鍋鑄掛にみせたら、つふしに外  
ならねへとさ、どうせうね。」

〔十一才〕

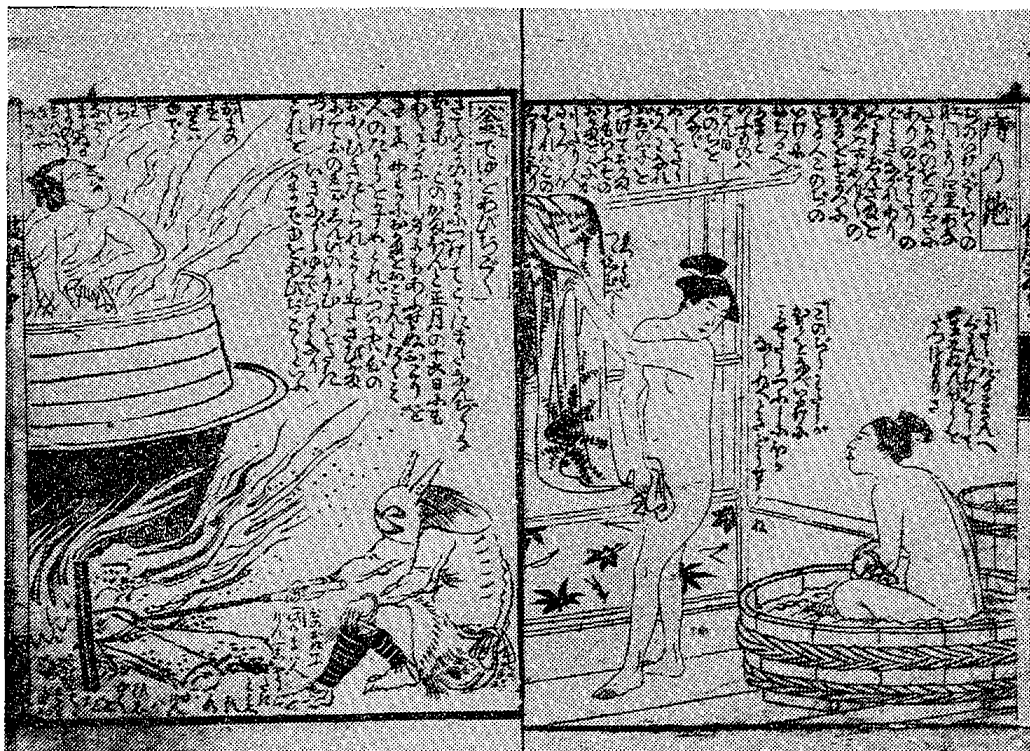
《釜でゆをあびぢごく》

さて今の釜につけてこゝにまた難渋な釜あり。この釜盆と正  
月の十六日にもあく事なし、身にも応せぬ奢を極め、俄にお  
かまをおこさんと巧み、人の宝をかすめとれば遂には心の鬼  
ゝ引立られ、みから出た錆釜にて己が慎恚の炎をたきつけ、  
いきながら茹らるゝなり。これを釜で湯をあび地獄といふ。

「かまのすだこはゆでゝやわらく、などゝまだぬるまの  
うちはへいきだやつさ。」

心の鬼いふ「此かまは人げん一しやう炊とみへる。かげ  
んは柄杓をたてゝみる事だ。」

〔十才〕 〔十一才〕



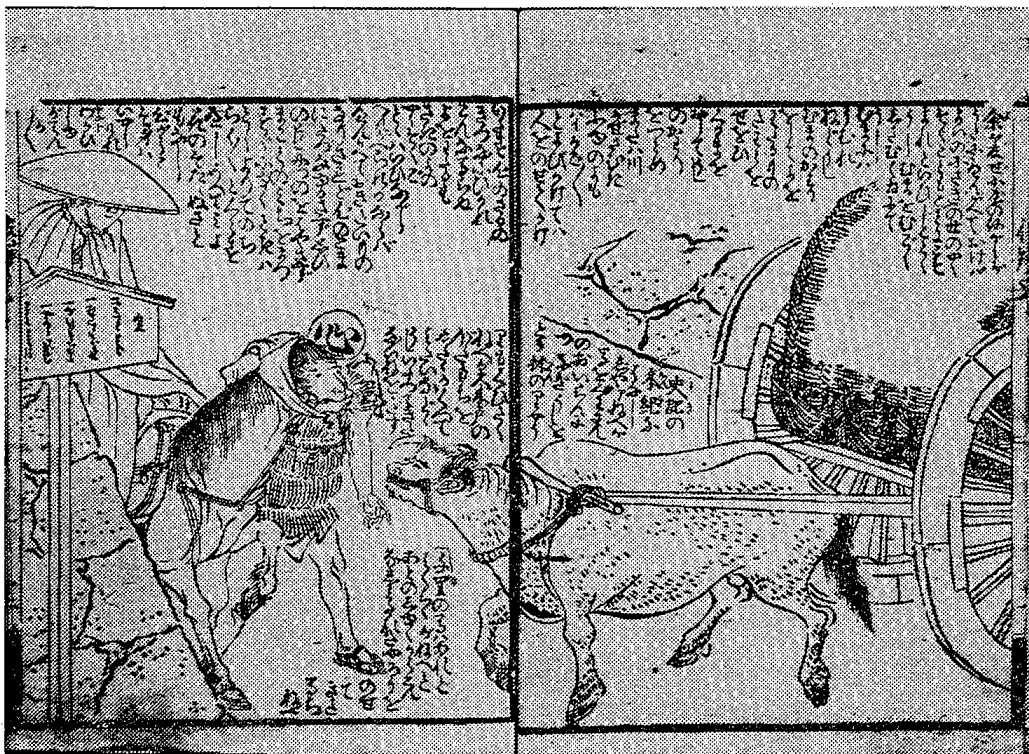
〔十一ウー十二オ〕

余が友にぜに屋の何がしが歌に、変更ておけばよいのに先の世の約束事もここにこそよれといひし如く、牛馬を酷くした報にて、牛馬には生れねど牛馬の代りをしてよを渡る者俵をせをひ、車をおして牛の代りをつとめ、または川風寒き冬のよも、ハイかごとくとよびかけては人をのせて馳出す。心の猿の絆にひかれ、こんな馬らぬ世を渡るも先のよの約束事ゝはいひながら、変更られるならば変更ておきたいものなり。されど心の駒に拘許さず、まことの道を真直にゆく時は年寄りて後らくくと暮すべし。植てみよ花の育ぬ里もなし心がらこそ身はいやしけれ、ナント若ひ衆がてんかく。

史記の本紀な話じやアねへが、馬をくわさんのおいらんにつなぎ、うしをとう林のりやうりもくひたくねへが、大木戸のぼたもちをしたゝかくつてみたいなどゝ牛いたつてきたないねをだす。

へ千里の馬はあれど伯樂がねへと、あとの宿からこんなしみたれたやろうをのせてきた、馬らねへ。

〔十一ウー十二オ〕



《天人のげいしやア羽衣の曲》

天人<sup>てんにん</sup>に五衰<sup>すい</sup>といふ事あり。富本のとみさかへては十方<sup>じっぽう</sup>十万の宝<sup>ちから</sup>をふらし、常盤津<sup>ときわづ</sup>の変<sup>かわ</sup>らぬ色<sup>いろ</sup>には長生<sup>ふろう</sup>不老<sup>かほ</sup>の顔<sup>いろど</sup>を彩<sup>いろど</sup>り、雲<sup>くも</sup>の下<sup>した</sup>方に浮世<sup>うきよ</sup>のちりからを厭<sup>いと</sup>ひては羽衣<sup>はごろも</sup>のはねをほしがる。此<sup>こ</sup>とき小菊<sup>きく</sup>の紙花<sup>かみばな</sup>ふり、百味<sup>ひゃくみ</sup>の飲食<sup>おんじき</sup>の食飽<sup>くひあき</sup>をすれば、いつもそはくして脇目<sup>わきめ</sup>からみては面白<sup>おもしろ</sup>い「やうなれど、内証<sup>ないせう</sup>は苦<sup>くるし</sup>ひものにて悉皆<sup>しつぱい</sup>銭<sup>ぜに</sup>のあみだ如来<sup>わうじん</sup>や黄金<sup>はうごん</sup>の肌<sup>はだ</sup>のぼさつ達<sup>たち</sup>に使<sup>つか</sup>れ、夜の七ッ八ッにも眠<sup>ねむ</sup>い目をこすりく座敷<sup>ざしき</sup>を勤<sup>つと</sup>め、二日<sup>ふたにち</sup>酔<sup>よひ</sup>の持越<sup>もちこぎ</sup>酒<sup>さけ</sup>には顔色<sup>がんしよく</sup>忽<sup>たちま</sup>ち焦悴<sup>せうすい</sup>する。これを天人<sup>てんにん</sup>の五衰<sup>すい</sup>とは申<sup>もう</sup>すなり。

「真如<sup>しんにょ</sup>の月見<sup>つきみ</sup>にははごろものそろいをきせるつもりだ。

「てめへたちふたり斗<sup>たたか</sup>でさわるでは、どうかぜにかねをわきものにするよふだ。

「モシこう寝転<sup>ねころ</sup>むだところはいけ存才<sup>ぞんざい</sup>らしいが、こういふ身<sup>み</sup>にならねへと天人<sup>てんにん</sup>めかねへからさ。



〔十三オ―十四ウ〕

地獄も極楽も悉皆己くが心にありて、迷ふ時は鬼となり  
 悟る時は仏となる。五欲とて人に五ツの欲あり。金がほしい、  
 あの人さんと添てみたひ、のんでもく酒が飲たい、悪い子が  
 かわいくと、目でみ、鼻でかぎ、口でい、耳でき、心に  
 思ふ願望、みなこの五ツの欲「心より出る故、此ちまたを  
 よく道の辻といふ。子ゆへの闇恋の闇と欲に心もくら闇にて、  
 曲角はなはだ危くして、全て此欲道の辻へかゝる時は自ら  
 目が眩みて迷わぬことなし。早く無何有の辻ばんで聞て、ま  
 ことの道を辿るべし。

へさぞよの人が道知ずといふてござんせう。

へころびやんな。手てをひきませう。

へどのみちこのみち飲ねへけりやアたちきれねへ。

へこれく俺がゆくところはどつちでござる。とかく金

のある方へ足がむきます。

〔十三ウ―十四オ〕



《財宝極樂》

さてよくどうの辻に迷ぬ人が安樂世界に世を渡る。それ極樂とは樂みを極るとかけとも、奢を極め樂みにふけるはまことの樂みにあらず。己くが身の程くをしりて主人に傳き親を敬い弟を憐み夫婦中をよくして、元日から大晦日までぶつくりとした小言もなく、にこくとして月日を送るときは、じんだみそに香の物も百味の飲食よりも旨く食へ、その身も自ら人に尊まれ、財宝十萬億兩の分限となり富貴の家に浮上る也。老子二曰、大山宝あり、宝に心なきものこれを得ると。ほしいくの欲のない人却て天の助ありとするべし。

へ御隠居様は弥陀の本願四十八かんお稼き出なされて、去年百八の煩惱もおしまいなされた、御長命でめでたい事だ。

へ剛毅朴訥は仁にちかしと、何にも知ぬが仏でござる。  
へさいほう十萬億兩をみや、いかひ事あるの、みんな坊にくださるのだよ。めでたしくく。





〔十五ウ〕

五戒警諭詞

偷盜戒 ぬすみのいましめ

ぬきあしをしてくる秋も犬蓼のはやほへかゝる門のしらつゆ

馬琴

妄語戒 うそのいましめ

八千代とは花のうそなりたまつばき

支考

邪淫戒 いろのいましめ

やすからぬ閨の通もしめて来る罪何ほどのみそか男の掛

曲亭主人

飲酒戒 さけのいましめ

あさかほに我は飯くふおとこかな

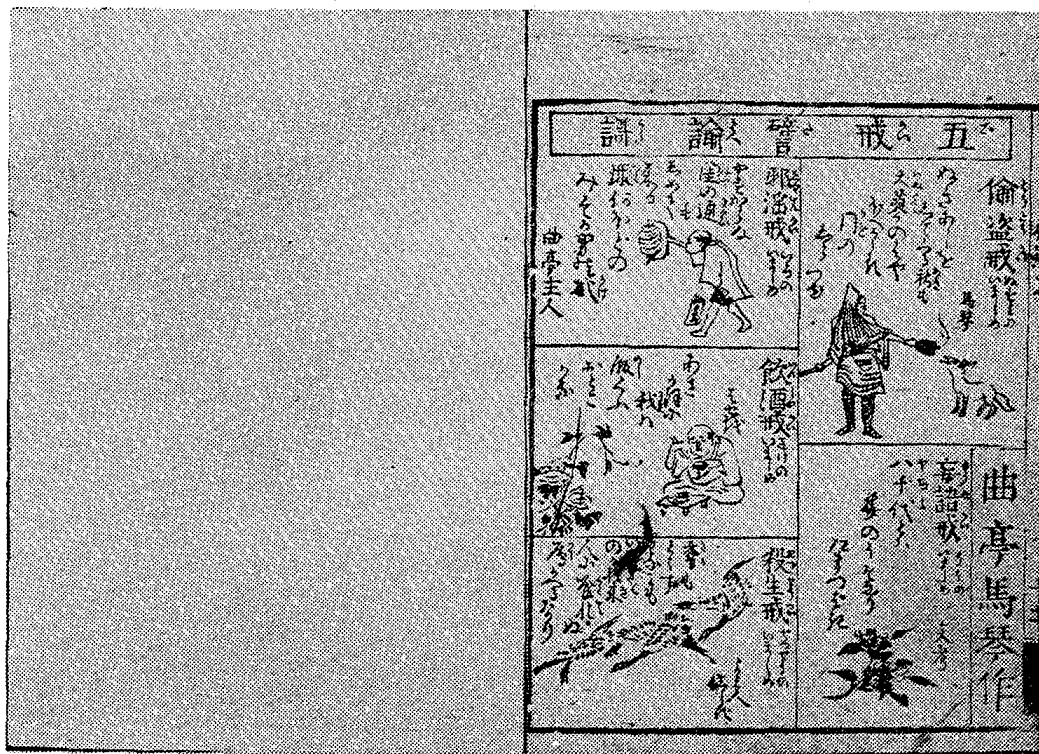
はせを

殺生戒 せつせうのいましめ

鷹もとらずわなにもいらすのかれ来て人に喰れぬ雁かへるな

よみ人しらず

〔十五ウ〕



りやうりちやわそくせきはなし  
料理茶話即席話

〔一オ〕

(振り仮名・句読点は原文のまゝ)

佳骰ありといへども。食せざれば其味ひをしらず。金言あり  
といへども。説ざれば終に通じがたし。余一チ日書案の庖厨  
盤に直り。頓に三巻の献立を綴る。硯蓋の玉池に向ひては。  
烏絨の折墨を味ひ。陶盤の鈍才を省ては。椎実の敗筆を試  
む。鼻に鰻鱧の薫を嗅で。意に呆蝶の樺焼をおもはず。耳に  
味酒の漚を利て。陶に尊酒の奢侈をねがはず。廻勧膳蝶脚  
のはし書して。今茲の仕出しとすることしかり。

寛政十一巳未の初春

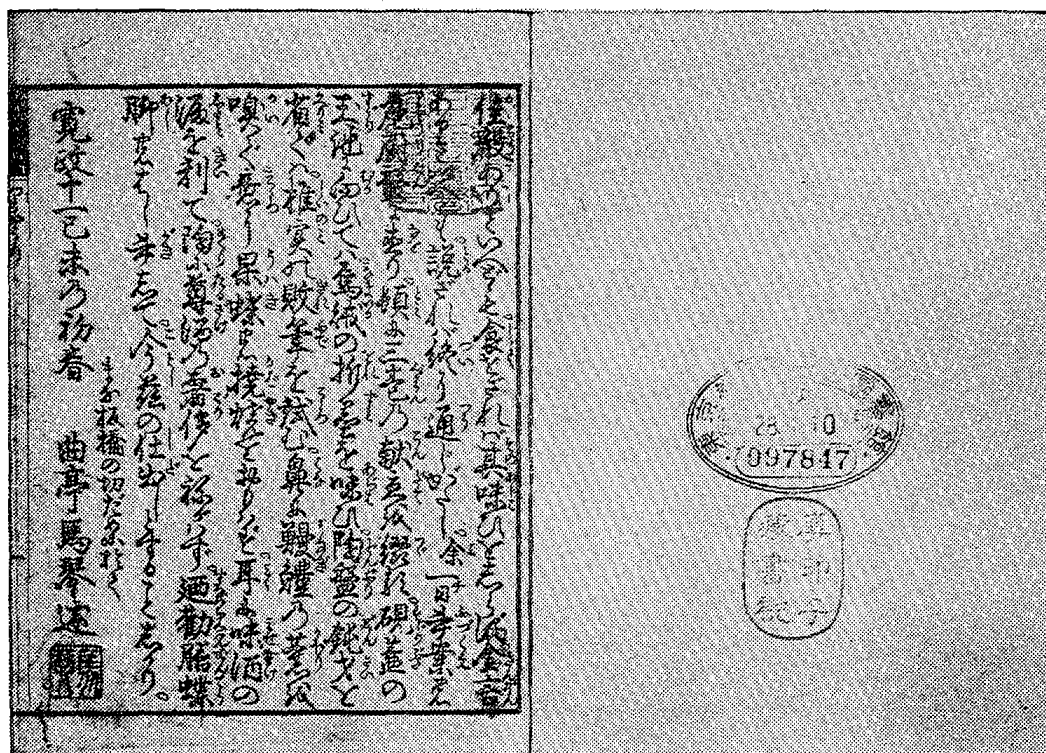
まな板橋の切だめに於て

曲亭馬琴述

〔二ウー二オ〕

草双紙の板元例の如く種本催促の付文をよこしければ、作者

〔一オ〕

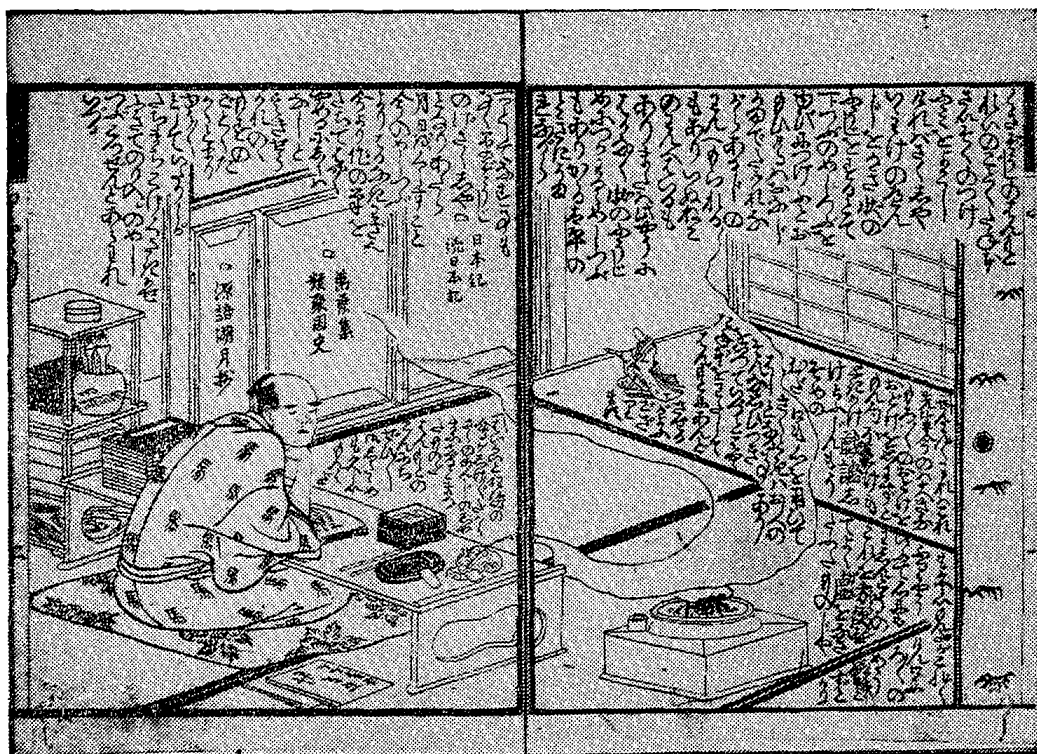


言訳の返事をかき、状の封じをするとして一トつぶの飯粒を指につけ、ふと思ひけるは、同じ釜で炊れながら主の碗へ盛れるもあり、犬猫の碗へ入るもあり。または此やうにはかなく状の封じめに使わるゝ飯粒もあり。かゝる太平の時に生れながら「一ツ」としてなす事もなく草双紙の戯作者となり、あたから月日を暮すこと今の飯粒よりはかなき業也。今より作の筆を絶て早くやめるに如くはなしと、其気性枯野ゝ鵲の如く高くとまり、悠々としていたりしが、忽ち焦臭き風吹て糊入レの飯粒忽然と現れいづる。

へぜんわんゝ、我はこれも久しいもんだが、これゝ先生今のは大きな不量見、口に諸ゝのおどけをいふて心に諸ゝのおどけを思わずとわ神道の妙文句、仏もこれを方便無量とときかけ、謔戯してよく虚をなさずと毛唐人も歌たものじゃ。かりそめのむだ口も心を用ひてきくときは教の緒となる事あり。そんな思ひ付をいつて居つと、早く種本を渡して板元に安堵させるがよふござります。

へ誹諧と狂詩の会が繁々だから、作の案じのじやまに

「二ウー二オ」



なる。こまつたものだ。板元はんもとのこんにちぜひく御したゝ  
めも久しいもんだ。

〔二ウー三オ〕

作者さくしや飯粒めしつぶにいちばん言い込こめられ初はじめ悟さとりの眼まなこを開ひらきしが、早はやくもきやう中に一しつの趣向しめこうを案あんじ出でしたり、その発端はつたん○今は昔むかしこゝに即席料理兵衛そくせきりやうりへとて料理りやうりの「献立けんたてを仕方しかた話はなしにする男あり。茶飯ちやめしのない日待まちには少し益えきあるに似にたればとて、うまい物好ものすきの手合毎晩料理兵衛てあいがいばんりやうりへが話はなしをくいくくる。

「料理兵衛りやうりへ曰いく、とかく料理といふものは話はなしをするやうなものにて、上戸じやうどにも下戸げどにも年寄としよりにも若い者わかものにも口くちにあふよふにするのが料理りやうりといふものじや。なんぼ面白い話おもしろはなしでも話はなしべたにされると新あたらしい魚さかなをりやうるうちに腐くさかしてしもふよふなものにて、一向いっそうたわいかこさらぬ。

「さてくうまいはなした。後あとのはなしはつゝしんでかゝア左衛門ざゑもんへみやげにいたそう。

「なるほどかみくだいてきけば腹はらにたまります。

〔二ウー三オ〕



「身代もちの按配がとうもいへぬ味いかこさる。してみ  
れは家をおさめるも按配ものとさめます。」

〔三ウー四オ〕

○吸物 おちつき／大のすましにて

・やせきすに ・かんしやくうど

○盃 ・水でうし

料理兵へいわく、おちつきの吸物は座敷の按配が肝腎也。客  
はぐつとすましにすましていても、河東節の煮出で味をつけ、  
吸口の蔀の渡盞も一座につらなり、器をぐつと手きれいにし  
て膳をすへ、酒は「七ッ梅やアに剣菱を飲せ、どんなあたじ  
けない手あいの口にも合ふやふに、むまいはなしをして食せ、  
盃のめりやすに水でうしで浮したてる時は、身代の食傷して、  
金ざいふの腹をくだすことあり。つゝしむべし。」

「やせきすのすいものは、いとしまじやの。女郎衆での  
みかけたい。」

「つよいてうしてこさりやせう。そのかはりに、かんと

〔三ウー四オ〕





つくりについて、声がたちます。

「もし、三下りに下りんす。てうしのかわりでおつす。

〔四ウー五オ〕

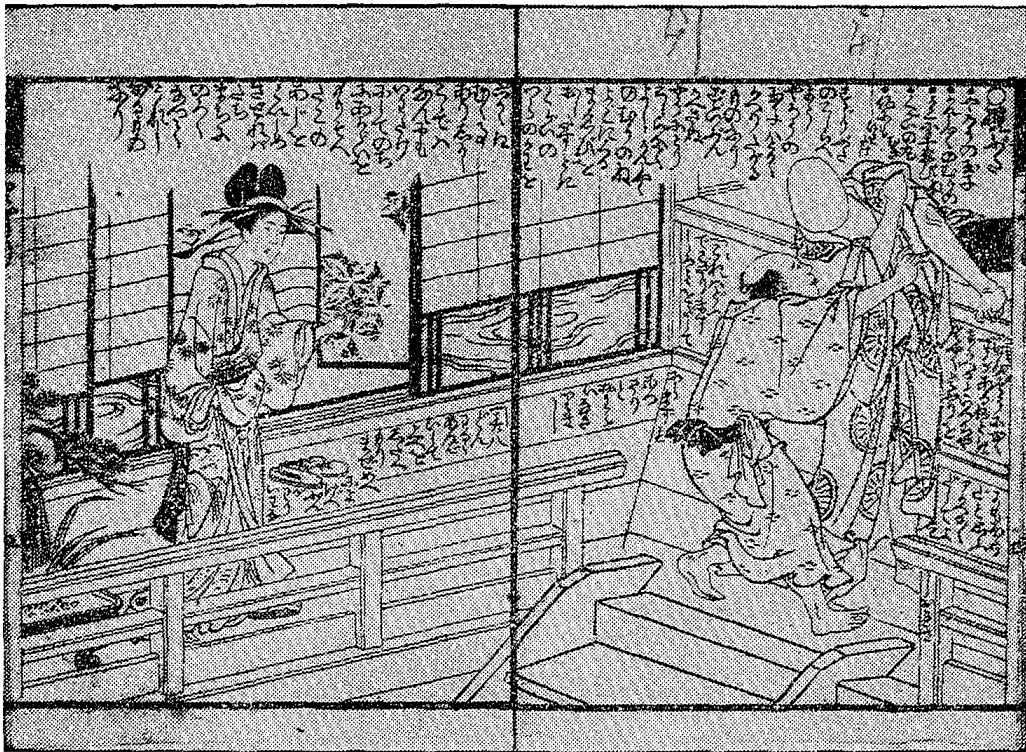
○硯ぶた ・やろうの玉子 ・かんしやくのむりのね

・よこに車ゑび ・くがいの丸むき ・何にもいわたけ  
すゞりぶたの拵へよう、野郎の玉子はとかくかへりたがるものなり。随分かへさぬやうに取拵へてよし、癩癩の無理のね、横にくるまゑびを押出すとき、苦界の面の皮を「六角にむく事あり、しかしこゝではなんにも岩茸にして、後に赤貝をもりそへ、たこの味をくいしめさせれば忽ちにのろくなつて嬉しがるものなり。

「下卑蔵にゆくにも方途がある。何時だと思ふ。モウ帰るといつちやア帰るゝ、早く羽織をだしてよこしおれさ。  
「これはどふでござります。しろみをだして睨まざとあつさりとお笑いなさりまし。

「喜八どんわるく按配して上へを下へもり交めへによ。

〔四ウー五オ〕



外聞がわりいわな。

〔五ウ〕

○はち肴 ・ だいの はなあき

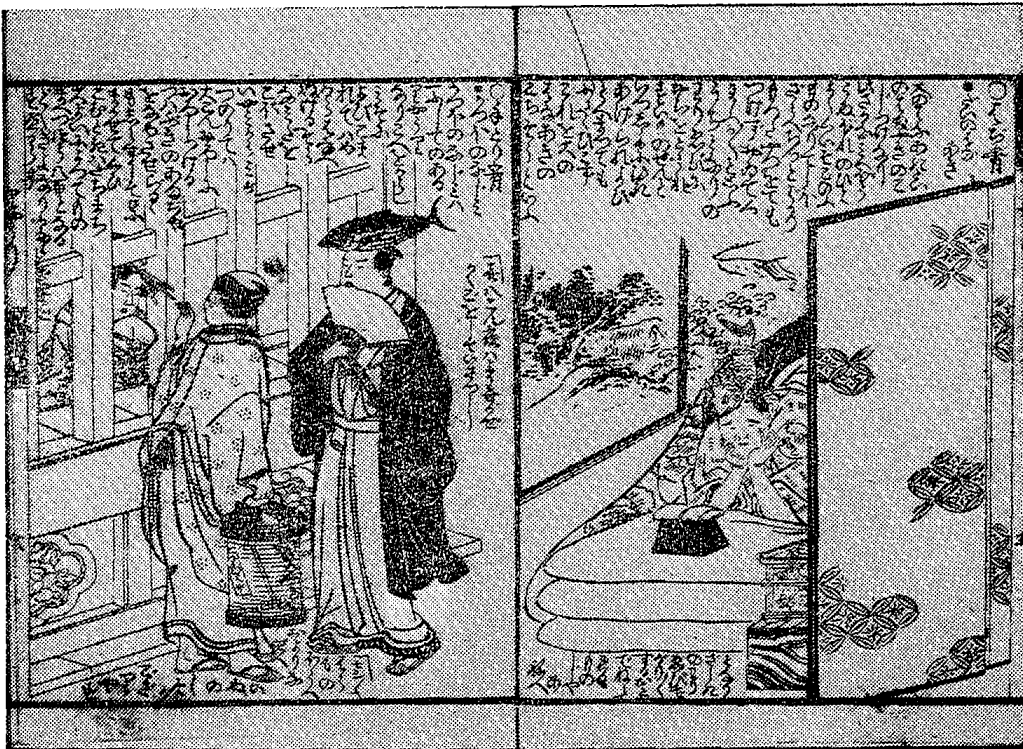
大のはなあき、鯛の浜焼のこじつけなり。此さかなみへ坊うぬぼれの人よく食損のふものなり。てしほ皿へちつとばかり盛たやつを手も付ずおゐて、くわふかくと思ふうち、となりのわりゑびに落を取れ、吸物膳と一所に引上られ、よひとへ待てもふたゝひこず。これを大のはなあきの御馳走といふ。へとなりざしきのわりゑびでがりゝする音でねられるものじゃあねへ。

〔六オ〕

○手とり肴 ・ かつほのなじみ

鯉のなじみは一ふし手のある料理なり。声をからしみそに呼込れては目から鼻へぬける空涙をこぼさせ、いやみからみが募りては大根おろしにおろしつける。石蓼の甘茶を嘗させら

〔五ウ〕 〔六オ〕



るゝもしらずして口に任せて食込む時は、忽ち大酔によつて  
物前づほら八百となる毒魚なり。必ずすごすべからず。

へ喜八、こん夜は酔せるぜ、覚悟をしていさつし。

へモシくはらものほうへおよりなせへ。いぬのくそが  
ござりやす。

〔六ウー七オ〕

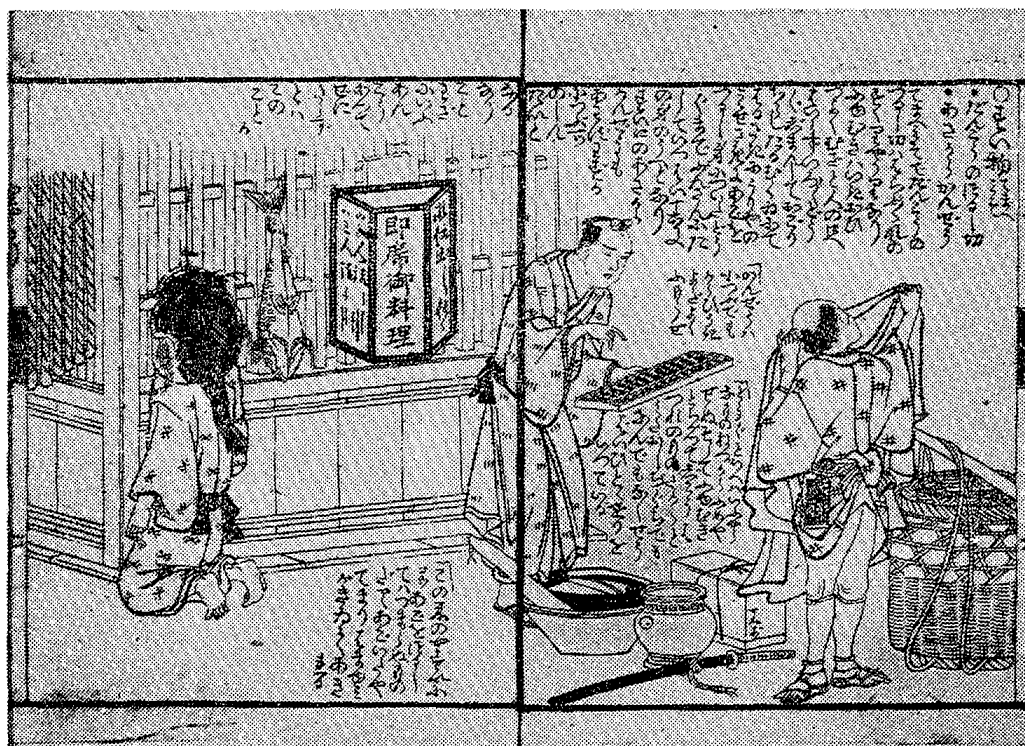
○すい物 てまへみそ ・ だんこうのつるし切 ・ あさか  
らんぜう

手前味噌で談合のつるし切は腹脹の好く料理なり。冬向は  
勢つよく、むざと人の口へ入らず。いろく道具自慢して  
奢り散したる報にて春先に売屋の店先にあごをつるし、身に  
ついた道具まで分散にだして、一杯十六文の身の上となり、  
吸口のあさからんぜうも合ず、僅か小粒一ツの身代とな  
るなり。諺にいふ、あんこう合て銭足ずとはこのことか。

へ勘定は小つぶでも辛ひうきよだ、よくふもうぜ。

へ道具といへばいふやうなもの、ねつからふめやせぬ。

〔六ウー七オ〕



そして冬向と違て時候外れの物たからと見倒し、ぢぐちでもなんでもなく商売一通をいつている。

「この米のやすいにコウあごをつるしてはつまらぬものだ。アゝあごいたや手鞠破魔弓が聞てあきれる。

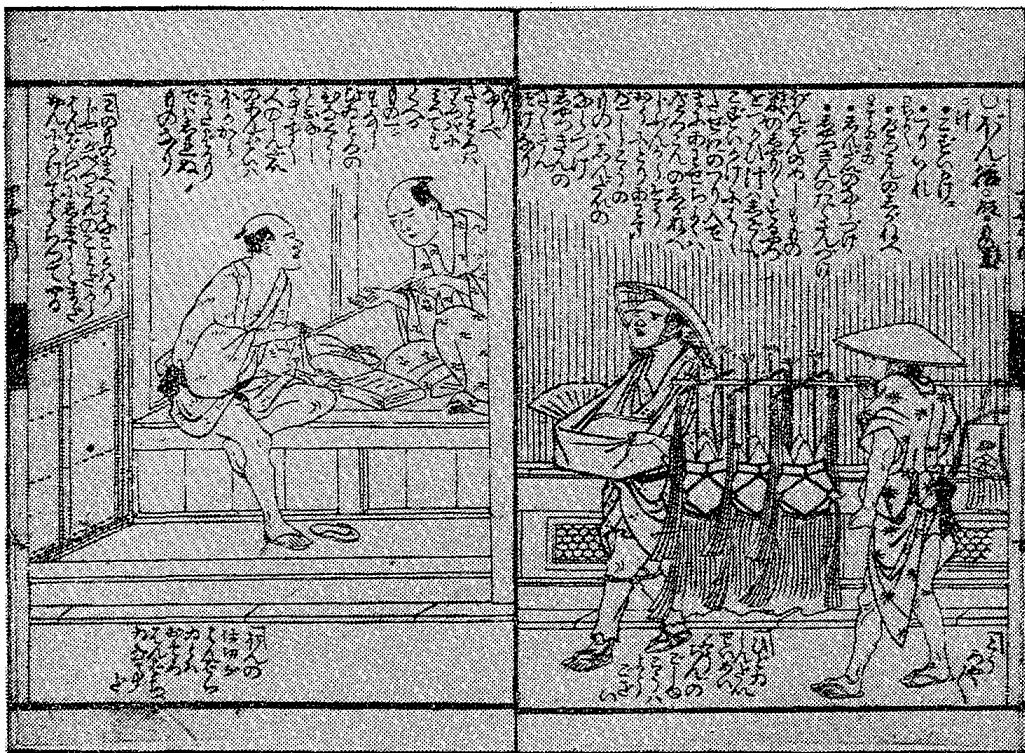
〔セウー八オ〕

○ぼん膳。飯・もの米。汁・こずいかけニ・つりいれ。ちよく・べつこんのしがねへ。このもの・しんだいのならづけ・しやつきのたくさんづけ

ぼんぜんの飯ももの米のしやりくするやつをつかひ、汁はしごくこずいかけに端銭の釣入でまに合せ、猪口は別懇のしがねへ時分から相応に取合すべし。香の物は身代の奈良漬借金がたくさん漬なり。」盛並べたところは立派にみへても食るもの一ツもなし。ぴるとろの雛菓子ともし事にて、人の身代の按配は外からみたばかりではしれぬものなり。

「この物前はみな断りじやが別懇のことだから半払にし

〔セウー八オ〕



ますと、まだ恩にかけてはらつてやる。

へ灯籠や〜。

へひどゐしんだいせいめいこうぢんのごしゅこうはよう

ござい。

へ盆の仕切がはんばらゐとは、おそろはんばらゐな事だ。

〔ハウー九オ〕

○平 ・はなの下の長伊吾 ・よいざめのかんべん

・くやしいたけ

平は百の口が十六文ぬけたと思ふほどな長伊吾、のらくらしたがる面の皮をこきむくつて使ふべし。十ねん耄兩ぐらゐに  
てしごく使いでのあるものなり。かんべんの拵へよう、よい  
ざめを三枚にをろしつけて強かたゝきのめし、久介くずを裁  
人にいるれば 自ら勘弁がついて、とう〜まるくなる。

へまして〜先とつくりとかんべんしてみる。かまぼこや  
でたゝかれた迄は覚えているが、あとは一向おぼへぬ。

へ旦那またおよいなさつたの、さあ〜お帰り〜。蒲

〔ハウー九オ〕





鉾ならば板へのせてもいゝが、はんべんなれば板へものるまいし、いつそ抱てまいりませう。ハテ長いものにはだかれろともいふから。

へなまゑいそうな、はやく急ぎや。

〔九ウー十オ〕

○膾（なます）・いやだのいけむり

○焼（やき）もの・女房（にようぼう）のひらき

○茶（ち）わんもの・店子（たなこ）のふがく

すの過た野郎金かん一兩をけんかにかひ、いやだのいけ無理をいふときの料り方、後の按配が難しく、そこで女房のひらきは開き直つて焼物にやきかける。此ときの手当は其場のしほを強くして押疎めておくべし。とりさいにくるたなこのふがくは鼻へ息の抜ぬよふにして、嵩でくわせる。もし身代の按配を悪くする時は大腐れとなり、店請といへども齒が立たぬもの也。

へひとつとは書たがあとがつまらぬ。ちよつと大やさん

〔九ウー十オ〕



へいつて早引<sup>はや</sup>をかりてこい。直二さり状をかいてやるは。

へ一ッ長屋<sup>や</sup>のよしみだ、わしがあづかりませう。

へふだん夫婦<sup>ふうふ</sup>してふつゝかな不量見<sup>ふりやうけん</sup>をだし、ふきげんもふかつてからではあれど、ふつつりふたりともにぶきげんを直す<sup>なを</sup>がようござる、ふとのつもる所もあるもんだ、とふがくいつていつこうわからず。

へおれが物は皆<sup>もの</sup>かたづけた。早く去状<sup>はやくさり</sup>かいて貰<sup>もら</sup>ひませう。

〔十ウ〕

○坪・なまゑひのこくせう

生酔<sup>なまゑひ</sup>のこくせうはあかゑいとくわせる地口<sup>ぢぐち</sup>也。箸<sup>はし</sup>にも棒<sup>ぼう</sup>にもかゝらぬ煮方<sup>にかた</sup>あり。もしつぼ六になつてかへる時は一ッ鍋<sup>なべ</sup>のぎんなるうに介抱<sup>かいほう</sup>させ、わんゝにけつまづいてころばぬようにもつていでべし。

へ足<sup>あし</sup>が煮詰<sup>にへつま</sup>つてどろゝする。たれぞ白湯<sup>さゆ</sup>をさしてかきまはしてくれゝばいゝ。

へみんなおれが飲込<sup>のみこん</sup>だくゝ、モウこくせうの鐘<sup>かね</sup>になるか

〔十ウ〕 〔十一オ〕



ら、はやくかへつてねるがいよ。

〔十一オ〕

○吸もの ・手代のうしほに

てだいの潮煮はちとあま口なかがよし。ずいぶん親方にあ  
らを見れぬようにしこしらへてよし。もし持前のこけにまか  
せて吸口のゆず漬などゝでかけるときは、たちまち酔醒のこ  
うせんをかぶることあり。つゝしむべし。

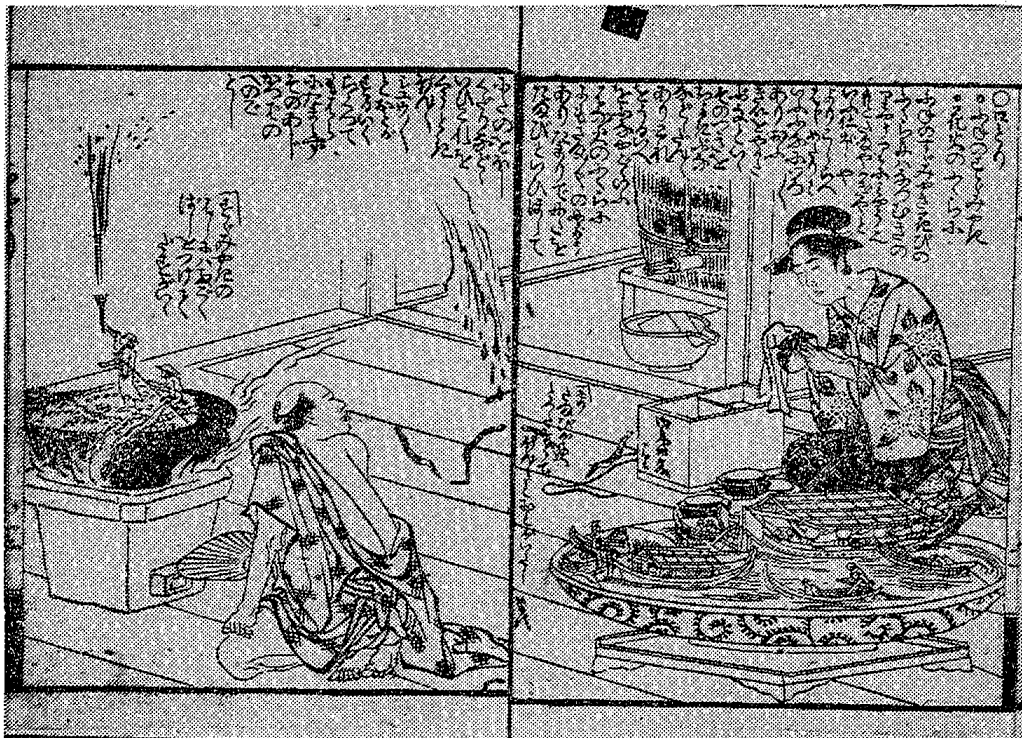
へこの手代実体とみへてぢぐちもいわず、煙草ばかりの  
んでいるゆへ、此半丁はかき入レすくなし。

〔十一ウー十二オ〕

○口とり ・ふねのすゞみやき ・花火のふくらに

舟の涼みやき花びのふくら煮は夏向の料理に妙也。もと玉屋  
鍵屋といふ仕出しやより拵へはじめたりといふ。鮎にいろ  
くあり、大きいを屋形ぶなといふ、その次を猪牙ぶななど  
ゝだんくあり。これをうる家を舟宿といふ。はな火のふく

〔十一ウー十二オ〕



ら煮にもさまぐの煮様あり。たまりでにたを玉火といひ、  
ほして」にたのを星下などゝいひ、これをくう時ぽんくシ  
ユウくと音がする。いくらくつても腹にたまらず、そのあ  
じ河童のへのごとし。

へすゞみやきのはしには両国ぼしをつけてだすがいゝ。  
へモウたま火が煮立たそうで、ぽんくと音が致します。

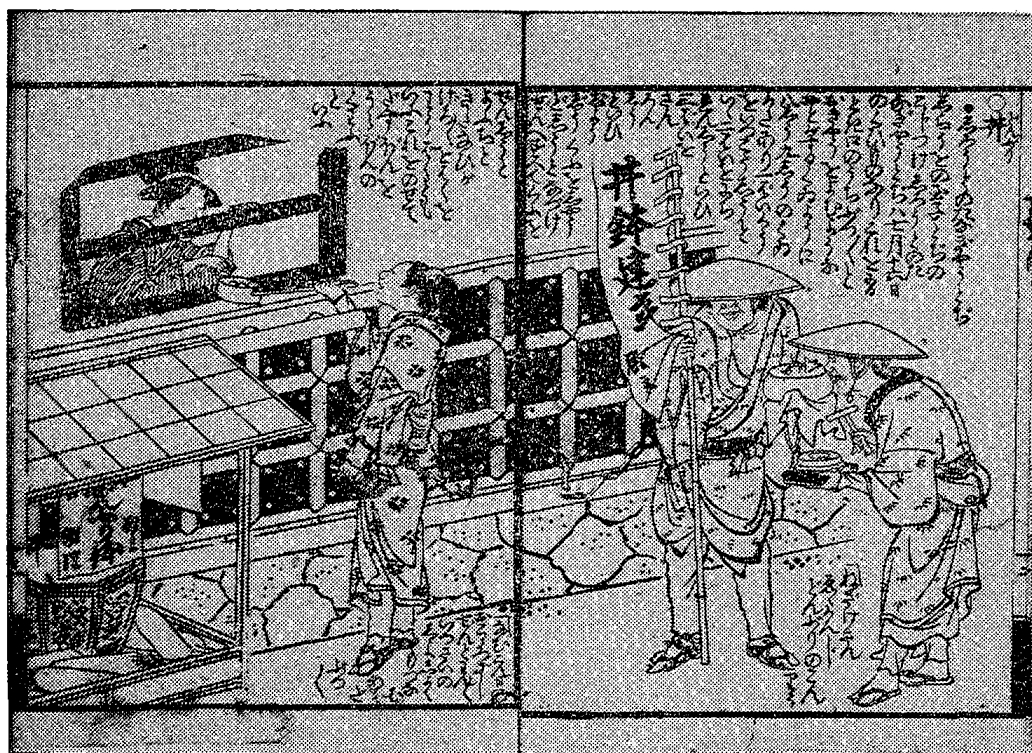
「十二ウー十三オ」

○井・しろうとのたなぎやうとぢ

白魚の玉子とぢのこじつけ、しろうとの店行とぢは七月十六  
日の食物なり。これをにる時口のうちぶつくとお経をよむ  
ような音がする。食様に八しう九しうの食方あり。一ぱいく  
うを一向宗といひ、三ぱいを三論宗といひ、常住くふを浄土  
宗となづけ、膳をすへてくふを「禅宗と呼ぶ。ちときたなひ  
がげろくをはくを黄驥ともいふ。これをのせてだす盆をう  
ら盆のくわふといふ。

へねぎけさんゑゝかんじ、どんぶりの建立。

「十二ウー十三オ」



へなむこん日のお志、ぜんとわんく一切の諸食物、  
なむあみだぶつく。

〔十三ウー十四オ〕

○銅やき・かゝのいり鳥・ちくごのかまぼこ・くち

まめのもやし・うそをつくいも

かゝの煎鳥かゝののつへり、料理方にいろくあり。色の黒  
ひを黒かゝといふ、青ざめたやつを青首かゝ、まだ白歯てい  
る時はかゝやはじろといふ。装品の品、筑後蒲鉾ずんぐりと輪  
切にし、口まめのもやしべつちやくちやくとにたて、嘘を  
つく芋ののらくらを茹でこぼして使ふべし。腰の廻のひろ  
蓋へのせて出すゆへ、いたって尻が重し。食残して一夜越せ  
れば遂に夜食のかたまりとなるはこれ也。

へモシだんなへ、あんばいがよくばたと代ておあがん  
なせへと、大のすけべいを申上る。

へおのしか顔をみて酒をのめは、おたふく汁よりうまく  
くへる。亭主の好のあかいわしてもおつつきはしない。

〔十三ウー十四オ〕





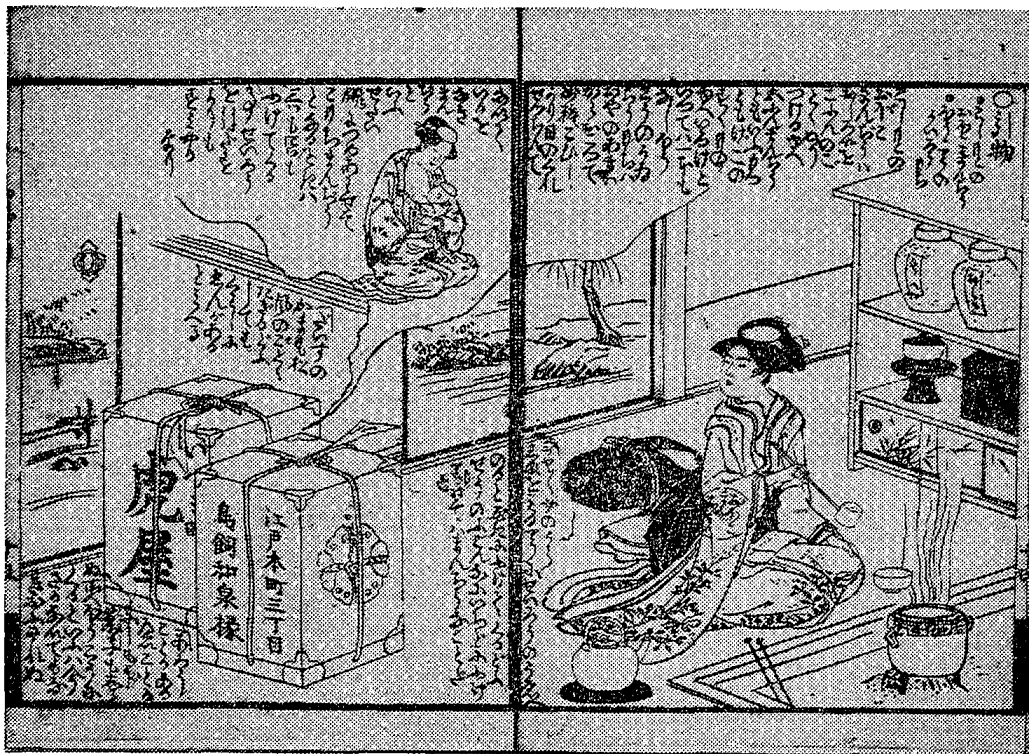
○引物 ・ こしものとのおほこまんちう ・ ほうこうのういろうもち

腰元のおぼこ饅頭は白粉を胡粉の如く塗付けるゆへ、五ふん饅頭ともいふ。もつともげこのすくもの故、色けといつては一本もなし。奉公の外郎餅は親の甘いから起て、砂糖こひしかり、日のくれ雲隠て」泣ているを泣饅頭といふ。せたい餅に詰合せてこもちまんちうとなるときは、三ツも四ツもふけてくる事蒸籠を引だすよりもすみやかなり。

へ台子の釜も松風のごとくたぎる。どふしても菓子に縁があるときみへる。

へヲヤ／＼女の浦島をみるやうに、せいらうの上へのると直にふけてくる。どふせうのふ、こんないちどにふけてきては、まんちうなことだ。

へあろう事かあるへいことか、西も干菓子もしらぬ所へ奉公にくるといふは、今さかないてもなきおふされぬ。



〔十五ウ〕

右に述たる料理献立は、近く譬をとり、かの食へどもその味へをしらずの一句より、天に五行人に五常あつて、さて食物にもまた五味ある趣をのべたり。されば人の家を治るのとひとへに料理の塩梅に似たり。腹を立てる時は塩辛声をはりあげ、憂い悲むときはその顔苦くし。また喜び笑ふ顔付は目元甘たるくみへる也。たゞ甘くなく辛くなく、喜怒哀樂の折に随ひ、誠を忘れざること三度の膳へ向ふがごとくする時は、上あんばいの浮世をわたること疑ひなし。

へおめしを食てめでたしく。

かまど將軍のうたにへよの中にうまいはなしのなくもがなまづい心の人の口には

曲亭馬琴作

〔十五ウ〕

